

注連川地区県営圃場整備(担い手育成型)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 沖 場 遺 跡

2000年3月

島根県益田農林振興センター

島根県六日市町教育委員会



1 遺跡遠景（南西から）



2 遺跡遠景（北東から、遠方の橋梁西詰が前立山遺跡）

## 序

昭和58年3月に開通致しました、中国縦貫自動車道の建設工事にあたり、埋蔵文化財の調査が実施され、前立山遺跡が発掘されました。この発掘地点に隣接致します大字注連川字沖場地区が担い手育成型県営圃場整備事業の対象となり、地区に所在する沖場遺跡について益田農林振興センターの依頼により発掘調査を実施致しました。

調査結果と致しましては、住居跡、土坑が検出され、弥生文化、土師器、須恵器等が多数出土して当地区が弥生時代後期、古墳時代後期を中心とする遺跡であることが判明しました。

この調査の結果と致しましては、前立山遺跡と沖場遺跡が同一地域内に存在する関連深い遺跡であることが判明しました。このことより、往時より現在までこの地において、人々と生活がなされて来たことを考える時、胸に込み上げるものを感じるとともに、後世へ伝えることの責任の重さも感じます。

本報告書が当町の歴史の貴重な文献として活用され、文化財保護の重要性を、一人でも多くの方に御理解頂ける資料となりますことを希望するものであります。

終わりになりましたが、発掘調査に当たり御指導、御協力頂きました島根県文化財課及び益田農林振興センター等、多くの方々に深甚なる敬意と感謝を申し上げる次第であります。

平成12年3月

六日市町教育委員会

教育長 中 谷 勝

## 例　　言

1. 本書は、島根県鹿足郡六日市町大字注連川における県営圃場整備（担い手育成型）事業に伴う、平成10年・11年に実施した沖場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、六日市町教育委員会が島根県益田農林振興センターから委託を受けて実施した。
3. 調査組織は次の通りである。

〔調査主体者〕 六日市町教育委員会 教育長 中谷 勝  
〔事務局〕 大石啓比古（六日市町教育委員会主事）  
〔調査員〕 水津浩信（六日市町教育委員会嘱託）  
〔調査補助員〕 茅原吉則（六日市町臨時職員）  
〔調査指導〕 柳浦俊一（島根県教育委員会文化財課主事）
4. 調査の実施に当たっては、次の方々から御指導・御協力を頂いた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

丹羽野 裕、中川 寧、守岡 正司（以上、島根県教育委員会文化財課）
5. 本書で使用した遺構・遺物の略号は次の通りである。

S I - 積穴住居、S K - 土坑、P - 柱穴・小穴（主柱穴は網掛けで表示）
6. 本書では遺構配置等で国土座標（X = -182194.500～-182272.000、Y = -23879.000～-23760.500）を使用し、部分的には磁北を用いた。
7. 本遺跡の調査記録、出土遺物は六日市町教育委員会で保管している。
8. 出土遺物の整理は水津が中心となり、佐藤芳枝、見川真弓、坂田雪江、前田賀津美、宗本理恵が行った。
9. 遺物の実測、浄書の一部を田中義昭氏（いなか書）に委託した。
10. 本書の執筆・編集は水津が行った。
11. 地形測量図作成、空中写真撮影は株式会社ワールドに委託した。
12. 発掘調査にあたっては次の方々に従事して頂いた。（順不同、敬称略）

三浦武子、井藤節恵、木村ハナ代、孝野輝雄、川本猛敏、宗田 妙子  
光長幸子、吉村利枝、橋本唯正、古村律子、伊藤カツ子、古泓清子  
坂崎房枝、内田直哉、潮 孝子、岩田フジ子、藤永チエ子
13. 本遺跡出土の鉄器に関しては、池淵俊一氏（島根県教育委員会）に鑑定を御願いし、玉稿をいただきた。また、鉄器のレントゲン撮影に関しては林健亮氏（島根県埋蔵文化財センター）のお世話になった。その他、縄文土器について足立克己氏（島根県八雲立つ風土記の丘資料館）、陶磁器について細田美樹氏（益田市役所）から有益な教示をいただきた。共々、記して感謝申し上げる。

# 目 次

序

例言

目次・挿図目次・図版目次

I 調査に至る経緯と経過 .....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	1
1. 六日市町の位置・環境・町勢 .....	1
2. 町内の遺跡とその概要 .....	2
III 調査の経過 .....	6
1. 試掘調査 .....	6
2. 本調査 .....	7
IV 遺構と遺物 .....	12
1. 弥生時代の遺構と遺物 .....	12
2. 古墳時代の遺構と遺物 .....	39
3. その他の遺構と遺物 .....	48
4. 遺構外から出土した遺物 .....	50
V 考察 .....	54
1. 遺構について .....	54
2. 遺物について .....	55
3. 前立山遺跡との関連 .....	57
VI 補論 沖場遺跡の鉄器について .....	58
1. 鉄器 .....	58
VII 結語 .....	61

## 挿 図 目 次

第1図 六日市町位置図 .....	1
第2図第1表 六日市町内遺跡分布図 .....	4
第3図第2表 六日市町内遺跡分布図 .....	5
第3図 沖場遺跡位置図 .....	6
第4図 沖場遺跡調査区配置図 .....	8
第5図 沖場遺跡検出造構全体図 .....	11
第6図 SI-01・a・1・SI-01・b住居址平面図・断面図 .....	13
第7図 SI-01・a・1出土遺物実測図 .....	15
SI-01・b出土遺物実測図（その1） .....	15
第8図 SI-01・b出土遺物実測図（その2） .....	16
第9図 SI-01・b出土遺物実測図（その3） .....	17
第10図 SI-01・b出土遺物実測図（その4） .....	18
第11図 SI-04住居址平面図・断面図 .....	19
第12図 SI-04出土遺物実測図 .....	19
第13図 SI-06住居址平面図・断面図 .....	20
第14図 SI-06出土遺物実測図（その1） .....	23
第15図 SI-06出土遺物実測図（その2） .....	24
第16図 SI-08住居址平面図・断面図 .....	25
第17図 SI-08出土遺物実測図 .....	27
第18図 SI-09住居址平面図・断面図 .....	29
第19図 SI-09出土遺物実測図 .....	30
第20図 SI-10住居跡平面図・断面図 .....	32
第21図 SI-10出土遺物実測図 .....	34
第22図 SI-11住居址平面図・断面図 .....	35
第23図 SI-11出土遺物実測図 .....	36
第24図 SI-12住居址平面図・断面図 .....	37
第25図 SI-12出土遺物実測図 .....	38
第26図 SI-02住居址平面図・断面図 .....	40
第27図 SI-02出土遺物実測図 .....	42
第28図 SI-02出土遺物実測図 .....	43
第29図 SI-05住居址平面図・断面図 .....	44
第30図 SI-05出土遺物実測図 .....	46
第31図 SI-07住居址平面図・断面図 .....	47

第32図 SI-07出土遺物実測図	48
第33図 SK-01、SK-02、SK-03、SK-04平面図・断面図	49
第34図 その他出土遺物実測図	52
第35図 その他出土遺物実測図	53
第36図 出土鉄器実測図	59

## 図版目次

- 巻頭図版 1 遺跡遠景（南西から）  
2 遺跡遠景（北東から、遠方の橋梁西詰が前立山遺跡）
- 図版 1 遺跡 1 調査区全景
- 図版 2 遺跡 1 SI-01  
2 SI-01土器出土状態  
3 SI-04・06  
4 SI-08  
5 SI-09  
6 SI-10  
7 SI-10土器出土状態  
8 SI-11
- 図版 3 遺跡 1 SI-12  
2 SI-02  
3 SI-05  
4 SI-07  
5 SK-01・02・03  
6 SK-02  
7 SK-03  
8 SK-04
- 図版 4 遺物 1 SI-01・b 出土遺物  
2 SI-06出土遺物
- 図版 5 遺物 1 SI-06出土遺物  
2 SI-08出土遺物
- 図版 6 遺物 1 SI-09出土遺物  
2 SI-10出土遺物  
3 SI-11出土遺物
- 図版 7 遺物 1 SI-12出土遺物  
2 SI-02出土遺物
- 図版 8 遺物 1 SI-07出土遺物  
2 その他出土遺物
- 図版 9 遺物 1 鉄器

## I 調査に至る経緯と経過

沖場遺跡は、島根県鹿足郡六日市町大字注連川にあり、昭和48年、島根県教育委員会による「中国縦貫自動車道予定地内埋蔵文化財分布調査」により宅地・水田を含めた80アールが古墳時代の遺物包含地と推定された。

平成10年、島根県益田農林振興センターより注連川地区県営圃場整備事業（担い手育成型）の実施に伴って事業予定地内に存在する周知の遺跡について協議依頼があり、その協議に基づいて同年11月より沖場遺跡及び周辺地域の試掘調査を実施する運びとなった。その結果、沖場遺跡とその周辺より多くの土器等遺物の存在を確認するに至った。

試掘調査の結果をうけて、その後の平成11年1月より本調査に着手し、同年7月初めをもって現地調査を終了した。この間、堅穴住居址11棟、土坑5基と多量の土器等を検出し、それらを隨時実測、写真撮影、整理した。

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 六日市町の位置・環境・町勢

島根県鹿足郡六日市町は島根県の最西南端に位置する（第1図）。現在、六日市町からは国道187号線により南の山口県岩国市、北の島根県益田市と連絡しており、また、中国縦貫自動車道六日市ICもあって、陰陽方面はもとより遠く関西・九州地方を結ぶ交通の要地となっている。

町域は、地勢上中国山地の中央部にあって比較的高い山地と深い谷部から成り立っている。これをやや詳しく見ると、東部より南部については寂地山の西から星坂を経て南の平家ヶ岳に至る間を山口県玖珂郡錦町と、さらに米山峰にかけては山口県都濃郡庵野町と接している。西部から北部にかけては鈴ノ大谷山から高津川の峡谷を



第1図 六日市町位置図

経て香仙原にいたる尾根線で島根県鹿足郡柿木村と、また、北部の一部にかけて島根県鹿足郡日原町および美濃郡匹見町と隣接している。町総面積は198.57平方kmである。

町域のほとんどは山地で、山塊の間を蛇行する高津川とその支流の鹿足河内川・高尻川・蓼野川沿いに狭い冲積平地が形成されている。平地の標高は、およそ240mから350mである。

気候のうえでは山陰気候区に属するが、脊梁山地帯にあって晩秋から初冬には霧が立ち込め、冬期には積雪量が多く、最低気温が零度以下を記録することも珍しくない。逆に、夏期には盆地特有の高温日が続き、稻作普及の好適条件となっている。

町の人口は、昭和30年に11,138人を記録したが、その後は年々減少の一途を辿り、現在は約6,400人となっている。町の主産業は農林業である。

## 2. 町内の遺跡とその概要

町内の遺跡については、昭和37年刊の『島根県遺跡目録』によると20遺跡が登録されている。それからおよそ10年後には県教育委員会の分布調査等により多数の遺跡の存在が確認されるに至っている。昭和48年の『島根県遺跡地図（石見編）』によると、町内遺跡の総数は100個所となっている。（第2図、第1・2表参照）。これは道路建設や圃場整備事業等の公共事業の進展によるところが大きい。以下、時代別に遺跡の概要を述べておく。

【縄文時代】町内では旧石器時代の遺跡は未確認である。しかし、サヌカイトの産地として知られる冠山が近くにあることから今後この時代の遺跡が発見される可能性は高いといえる。

縄文土器が採取された遺跡としては星坂遺跡、堂面遺跡、九郎原Ⅰ遺跡、九郎原Ⅱ遺跡、五味田遺跡、中藪遺跡等がある。これらは、いずれも高津川の流れに沿って2km程度の間隔をおいて分布している。これらの内、九郎原Ⅰ遺跡では早期の山形文が施された押型文土器が出土しており、町域最古の縄文土器ということができる。星坂遺跡では縄文土器や多数の石器の採取が伝えられ、山間地の盛んな狩猟生活を偲ばせている。九郎原Ⅰ遺跡出土の晚期突帯文土器も注目されている。突帯下に縦横に走る沈線文があり、「中山B式」に該当するとされている。町の中心部に存在する五味田遺跡や中藪遺跡は高津川の微高地に位置しており、後・晩期の集落址の可能性がある。今後、これらの遺跡の詳しい内容が明らかになれば、東隣の匹見盆地のように、中国山地の小盆地における縄文時代の展開の様子をより具体的に語ることができると思われる。

【弥生時代】弥生時代の遺跡は20個所を数える。これらは高津川の流れに沿って万遍ない広がりを示しているが、詳細に見ると、上流部の樋口・藏木地域、中流部の六日市・沢田地域と注連川・仲仙道地域、下流部の抜月・七口市地域というような地域的まとまりが認められる。これらの地域では、高津川の本流に左右の山間から流れ出た小河川が合流してやや広めの冲積地が形成されており、そうした地形が水田経営を営む農耕集落の立地に適していたことを伺わせている。おそらく、扇状地の末端と高津川本流の間に湿地があり、そこに扇状地の伏流水を用水として水田が開かれていたものと想定される。上記の遺跡のブロック的なまとまりは、水田経営に適した個所に集落が集中した結果とみられる。

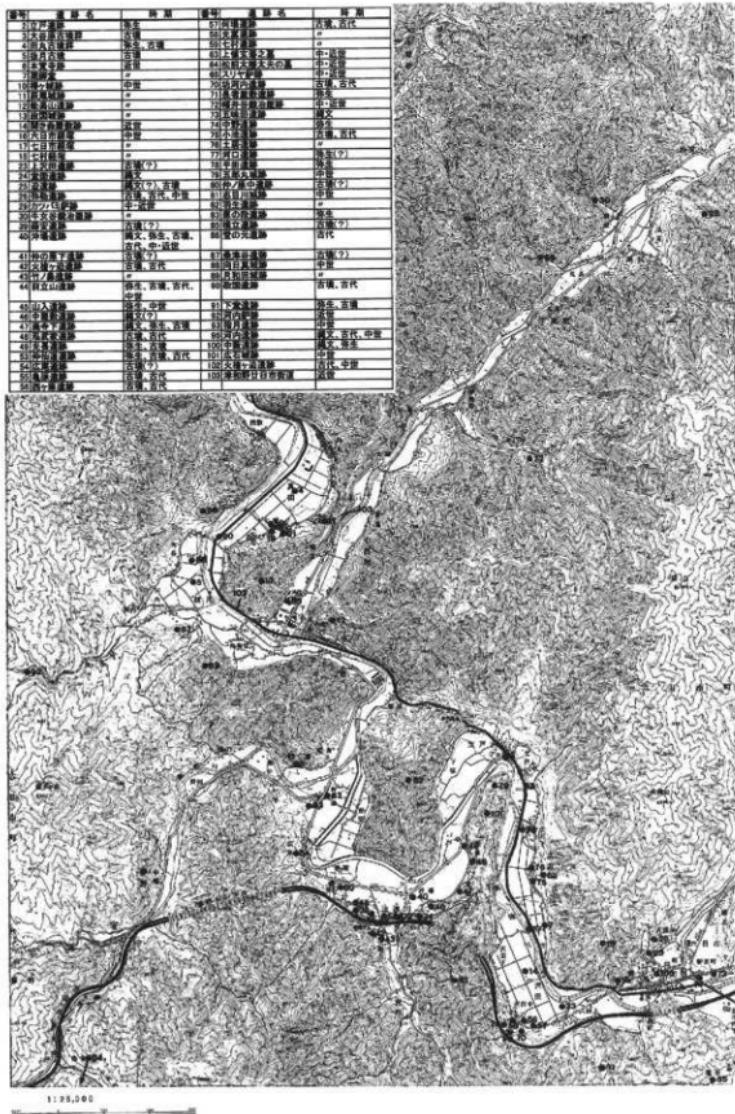
注意されるのは、六日市地区の中藪・野中遺跡のように、縄文遺跡と複合する弥生遺跡が比較的広い冲積地を占拠していることと、樋口地区のあし谷遺跡のように深い谷奥に位置する例が存在することである。こうした立地個所の相違は当町における初期農耕社会の発展を考察するうえで無視できない。残念ながら、ほとんどの遺跡の内容が不明のため、

弥生時代の変遷を具体的に明らかにすることはできないが、前立山遺跡で中期後半の墳丘墓と後期の集落址が発見されたことは重要で、そこに山間部における農耕社会の進展振りを垣間見ることができよう。今回の沖場遺跡の調査によってそうした内容がより豊かに把握されることとなったのである。

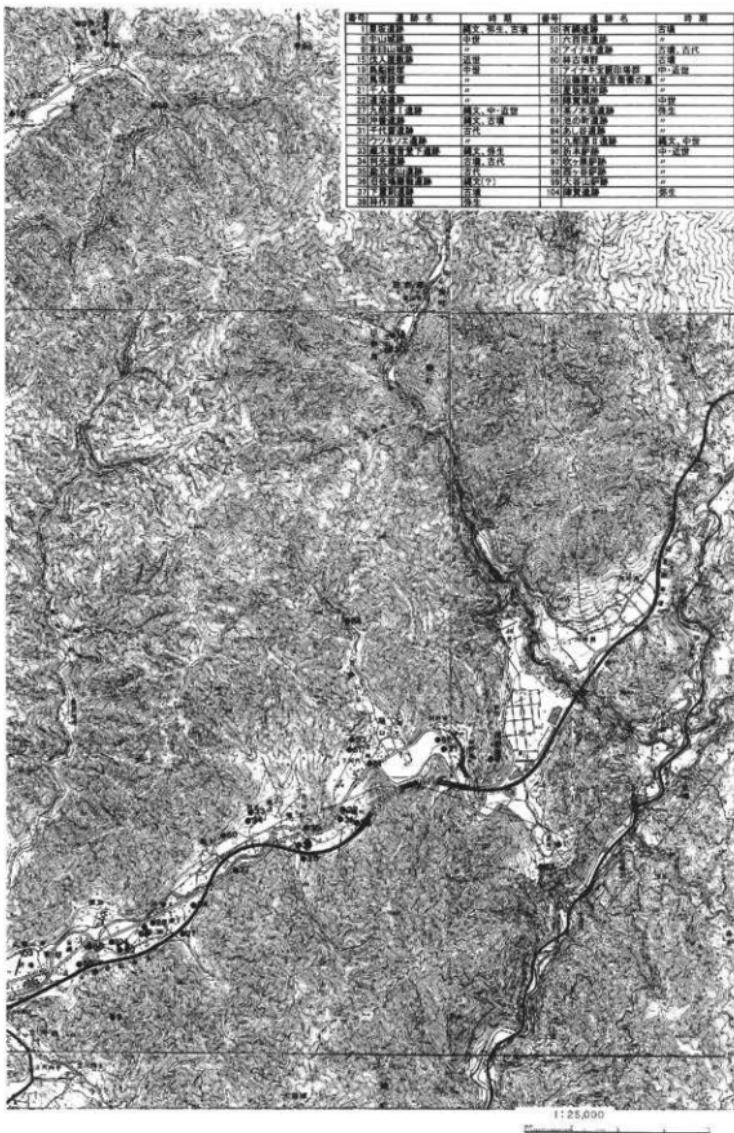
【古墳・奈良・平安時代】古墳時代の遺跡としては、まず抜月古墳（抜月地区）・林占墳群（藏木地区）等の古墳があげられる。前者は平地に造られた後期古墳で、横穴式石室から須恵器や直刀が出土している。須恵器・土師器を出す遺跡は約40個所が知られている。これらには奈良・平安時代のもののが含まれる可能性があり、古墳時代のみの集落動向を探るには限度がある。あえて、その分布で注意されることを示すと次の2点がある。その一としては前立山遺跡・沖場遺跡がある注連川地区に高い分布密度が認められること。その二は、幸地地区の亀原遺跡のように小支流の谷頭に遺跡がみられることである。前立山遺跡では庇付きの掘立柱建物址や墨書き土器が発見されており、ここに鹿足郡の郡衙があり、それに関連する遺構と遺物の可能性が指摘されている。確かに、注連川地区は弥生時代以来遺跡の集中度が高く、この一带に郡衙を中心とした集落が存在したことは推定してよい。古墳時代以降の遺跡が多数認められるようになるのも、こうした地域の歴史の動向と無関係ではない。山間地といえども、東西・南北交通の要衝をなす六日市町の歴史的特性がそこに示されているというべきであろう。

【中・近世】町内には各所で宝篋印塔や五輪塔が存在する。また、九郎原I遺跡のように中世陶磁器や石鍋のような遺物が出土する遺跡もいくつか知られている。沖場遺跡でも中世の陶磁器類や石鍋が出上した。さらに、交通路に面した山上には山城跡があり、その数は10個所以上となっている。これらは群雄並び存する中世期の歴史事情を物語る有力な物的証拠であり、今後の調査が期待される。

町域北部を北東から南東に流れ高津川に合流する高尻川の長い谷沿いでは7個所の製鉄遺跡が分布している。抜月河内炉跡は高殿製鉄跡として知られている。これらの多くは中世から近世にかけて操業された砂鉄を原料とする鉄生産遺跡で、当地域がその成立条件を備えていたことを物語っている。こうした製鉄関連の遺跡は、さらに増加することが予想される。



第2図 第1表 六日市町内遺跡分布図



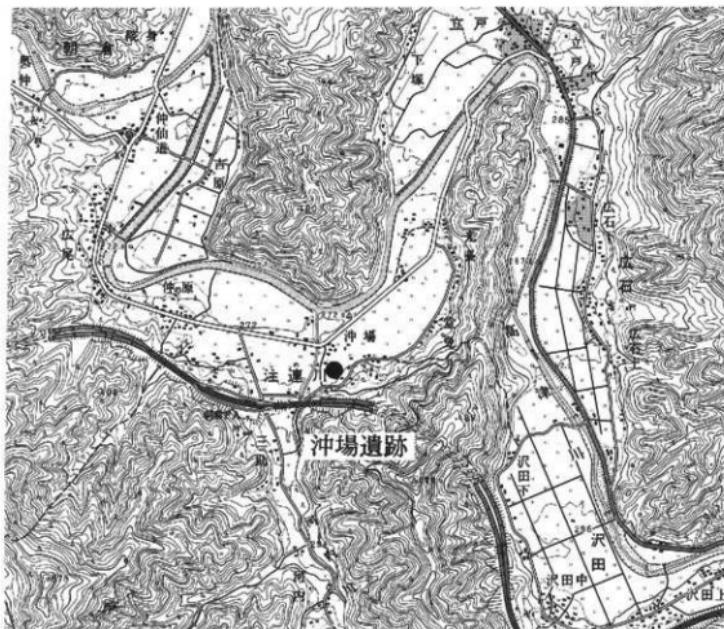
第2図第2表 六日市町内遺跡分布図

### III 調査の経過

#### 1. 試掘調査

【遺跡の立地】沖場遺跡が位置する個所は高津川の左岸に形成された扇状地上である。(第3図)。町内田野原地区から流れ出した高津川は、東西方向の断層盆地に沿ってしばらく西流し、沢田地区付近で北に延びる半島状の山塊に当たって北に流れを変え、その後広石地区へアーピンカーブを画いて南流、さらに沖場地区辺りから「U」字状に大きく方向を変化させながら北に流れ下っている。

沖場・注連川地区では南北に延びる峡谷から支流の一つの河内川が流れ出して本流に合流している。そこには本流と支流の浸食・堆積作用によって広い扇状地が形成され、扇端部一帯には低湿地が展開している。現在は、すべて水田として利用されているが、山丘麓から広がる緩斜面には南北から北西向きに傾斜した砂礫層が基盤をなし、平坦な水田部では還元状態のシルト層が分厚く堆積している。沖場遺跡は、この「注連川扇状地」(仮称)の扇央部から扇端部にかけて広がるものと思われる。前立山遺跡は、河内川左岸の丘陵先端部で、沖場遺跡の南西方向に位置している。



第3図 沖場遺跡位置図 縮尺1:25,000

**【試掘調査】**沖場遺跡は、昭和48年3月、島根県教育委員会による中国縦貫自動車道予定地内埋蔵文化財分布調査の実施で所在が判明した遺跡である。しかしながら、遺跡の範囲はおよそ80アールとされながらも、その限界は不明確であった。既述のように、闇場整備事業のためには遺跡範囲を明確にする必要があり、この点について益田農林振興センターとの協議依頼を受け、六日市町教育委員会において沖場遺跡の範囲並びに遺物包含層の有無を確認することとなった。そこで平成10年11月4日～12月25日の約50日間にわたって試掘調査を行った。

試掘方法としては遺物散布の密な遺跡の中心部分から河内川にそって3m×3mの試掘坑を設定して、それを掘り下げた。その結果、川沿いを中心地表より第4層とした黒褐色土層から遺物が集中的に検出された。出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器で、数量的には相当量になる。

以上、試掘調査により河内川の右岸一帯に遺物が濃密に包含されていることが判明して、この区域が沖場遺跡の中心部分とみなされるに至った。そこでこの区域から周辺部分を含めた5,000m<sup>2</sup>を対象とする本調査を実施することとなった。

## 2. 本調査

本調査は、平成11年1月14日に開始し、7月9日に終了した。中途、雪や雨等の天候により作業はしばしば中断を余儀なくされたが、およそ6ヶ月を要して調査を終了することができた。以下、調査の経過の概要について述べる。

**【発掘区】**要地方道鹿野・六日市線から、分岐した町道が河内川沿いを南に走っている。この町道の東側一帯に沖場遺跡は広がっている。試掘調査の対象とした地区は地方道と町道、それに南側を東西に走る中国縦貫道に囲まれた地区である(第4図)。また、前立山遺跡が存在した対岸の東丘陵斜面に続く平坦面でもあり、河内川に近い北西部は標高275.10m、南東の緩斜面と山腹の傾斜変換線は標高276mとなっている。その比高差は1m若である。

発掘区は、試掘調査によって遺物の出土が顕著であった町道東側の水田部、東西85m、南北60mに設定した。土層の状態は、基盤の砂礫層に疊を含む黒褐色土層が発掘区のほぼ全域に広がっており、さらに発掘区の中央より北～北西にかけて茶褐色土層が、黒褐色土層の上部に堆積していた。遺構の検出面は北部から北西部では茶褐色土層上面になり、東部から南部では黒褐色土層の上面であった。

このような土層と検出面のありかたは、遺跡が存在する平坦面が河内川によって形成された段丘地形であり、同時に、基盤の砂礫層が南東から北西に向かって緩く下降していることによるものである。本来は茶褐色土層も黒褐色土層も、もっと厚く堆積しており、堅穴住居等は深く掘られていたのであろうが、後世の水田造成により、住居の床面近くまで削平されたものと思われる。

**【調査の進捗】**調査は対象区域をA～Eの5区に分けて行うこととした。その際、A、B区(南北15m、東西75m) 北部調査区とし、C～E区(南北30m、東西75m) を南部調査



第4図 沖場遺跡調査区配置図

区とし、作業は北西側のA区から開始して、漸次東側のB区、南部調査区に転進することとした。検出方法は、耕作土等は重機掘削で行い、茶褐色土層や黒褐色土層上面は手作業によって追及し、さらに小トレンチを隨時設定して遺構の輪郭を押さえることにした。

発掘開始月の1月には北部調査区の西端・A区で円形系統の住居址・SI-01を検出した。この住居址は2棟が重複していた。2月になって、SI-01の東側でSI-02住居址を発掘した。

この住居址は竈をもつ方形の住居址である。これらの遺構の検出と平行して南部調査区の荒堀作業を進め、この月中で全調査区の耕作上を除去した。

3月になると、大候がやや落ち着き始めたので作業は順調に進行した。SI-02の東では円形の落ち込みが確認されたので、これをSI-03として発掘を行ったが、住居址とは認め難いこととなり、後日、上坑として扱い、SK-01と改めた。このSK-01の東側ではSI-04住居址が確認された。円形基調の住居址と考えられたが、2～3棟の住居が重複していることが予測された。その後、重複する住居址の中で床面から広く焼上が検出され、罹災していることが分かった。この焼上の範囲を追求する中で、結局、SI-04の北に円形のSI-06住居址があり、SI-06が火災を受けていることが分かった。2棟の住居址の新古関係は、重なり合う部分が狭く、判定は困難であった。

3月に入ってからは、北部で上坑等の遺構検出を続行し、さらに、南部調査区全体の荒堀も進めながら、C区には小トレンチを設けて、遺構の検出作業を急いだ。

4月に入って、SI-04の東で検出されていた落ち込みが住居址と分かり、SI-05住居址として調査を進めた。この住居址は、壁線が直線になることと、壁に接して竈が造り付けられていたことから古墳時代の住居址であることが当初から判明した。

小トレンチ等で遺構を探していた南部の調査区C区から方形の住居址が検出された。さらに、D区でも円形の住居址SI-08をとらえることができた。月末頃には、SI-08の東側と南東側からSI-09、SI-10の2棟の住居址が確認された。いずれも、円形系統の住居址と思われた。SI-10の床面からは焼土が広範囲に検出され、火災によって放棄されたことが知らされた。

5月前半は好天に恵まれ、作業ははかどった。この時点で北部調査区の全遺構は、ほぼ調査を完了することができた。後半には南部調査区の遺構検出、確認、実測写真撮影等に集中して取り組んだ。この調査区は、全体として砂礫の多い黒褐色土層に遺構が掘り込まれているため、住居址・土坑等の検出には困難が伴った。とくに、ピットについては形状や深さの把握に手間取った。最終的には、円形系統の住居址としてSI-08～SI-12の5棟と方形系統の住居址・SI-07、上坑SK-04を検出することができた。それと、SI-12の東側には住居址等の遺構が存在しないことが判明したことと成果と考えてよいと思う。つまり、沖場遺跡の南東部限界がこの辺りにあることを知ることができたのである。

6月は、また雨天の日が多く、作業は図面や出土品の整理に費やすことが増えた。晴れ間を見ての野外作業では、残された実測や写真撮影が中心となり、7月に入り、すべて終了した。調査全体の最終的終了日は7月9日とした。

#### 【調査の結果】足掛け6ヶ月間にわたる発掘調査の結果は下記の通りである。

検出された遺構としては、円形系統の住居址が8棟で、これらは弥生時代後期後に營まれたことが知られた。方形系統の住居址は3棟で、中、2棟は竈をもつ古墳時代後期の住居址である。他の1棟は、出土土器から弥生時代の終末に属すると考えられる。住居址以外の遺構としては土坑を4基検出した。これらは、坑の形状が一様ではないことと、上

器が、1基を除いて伴出せず、時期を明らかにすることはできなかった。(第5図)

出土した遺物はコンテナー50箱に達し、相当量になる。それらの圧倒的な部分は弥生後期の土器であるが、主体をなすのは瀬戸内西部方面に濃い分布がみられる土器群であり、これに安芸方面と山陰系の土器が部分的に混入していた。須恵器はコンテナー3箱分が出土した。いずれも後期のもので、山陰編年のⅢ期を中心とするものである。その他、陶磁器、土師質土器も数点出土している。とくに、輸入陶磁器で平安時代のものとみられる白磁が出土したことは注目される。

石器は量的に少なく、磨石や打製石包丁、砥石が目に止まった。さらに弥生時代後期の住居址と古墳時代後期の住居址からは数点の鉄器が出土したことでも注目された。

沖場遺跡の調査は開発に伴うものではあるが、六日市町教育委員会が担当する発掘としては、初めての本格的な調査である。また、この遺跡が、以前に行われた前立山遺跡に近接し、時期的にもかさなる部分があり、且つまた、町内の遺跡として内容が判明した貴重な事例となった。こうした、事情を考えて、調査はできるだけ公開で行うこととした。調査途中、町内の小学校と中学校の生徒に体験学習として、発掘に参加してもらっている。

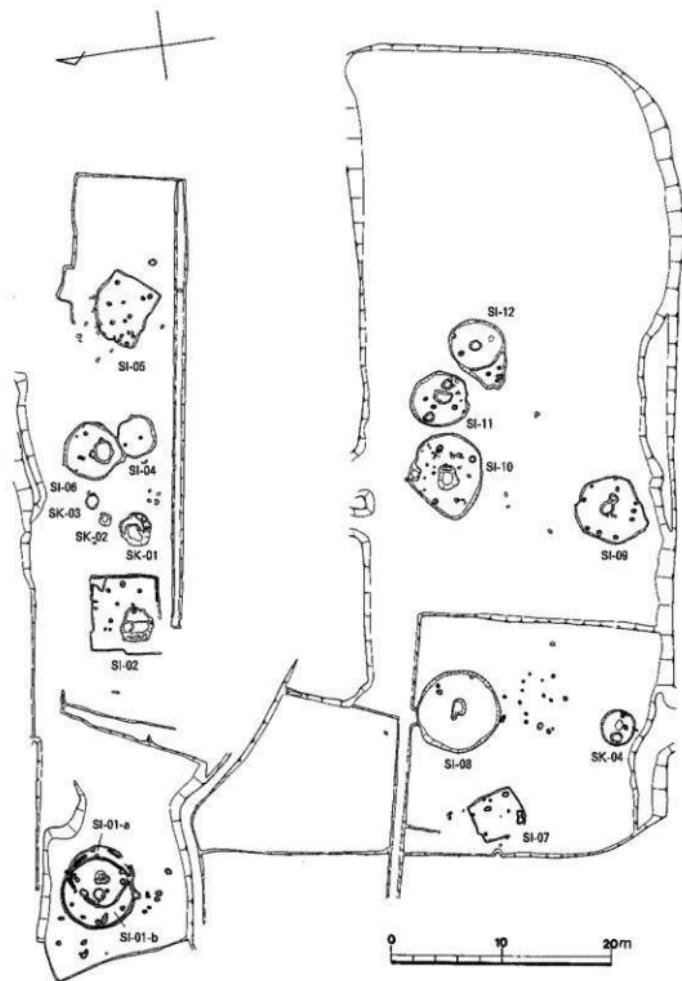
また、調査の方針を明確にし、精度を確保するために県教育委員会文化財担当の方から度々指導を受けた。厚く御礼申し上げる次第です。

試掘調査・本調査を含めると、発掘は8ヶ月を要している。この間、町教育委員会の各位を初め町職員、発掘作業に携わった町民の方々、内業のパートさん等々、大変多くの人々の協力・援助で、この発掘調査を無事終了することができた。

まとめて心から感謝申し上げます。



発掘調査作業風景



第5図 沖場遺跡検出遺構全体図

## IV 遺構と遺物

### 1. 弥生時代の遺構と遺物

#### ① SI-01・a住居址（第6図、図版第2-1）

【検出状況】北部調査区北西のA区で検出され、SI-01・b住居址と大きく重複し、これに先行する住居址である。東の壁・壁溝は失われているが、平面形はほぼ明瞭に残されている。壁際には2条の壁溝が部分的に認められ、東部に向かい、同心円式に床面拡張が行われたことを示している。拡張前の住居址をSI-01・a・1、拡張後のものをSI-01・a・2とする。

【平面形・規模】不整円形もしくは隅円方形の平面形である。拡張前のSI-01・a・1の規模は5m×4.8m、拡張されたSI-01・a・2の床面は墻元で5.2m×5.1mを測る。拡張前の床面積は約19.8m<sup>2</sup>、拡張後のそれは、推定で21.2m<sup>2</sup>である。

【施設】SI-01・a・1の主柱穴と思われるのは4個のビットである。P09（-37cm）、P11（-33cm）、P17（-27cm）とSI-01・b住居址の中央ビットとみられるP02の坑内縁で検出されたが深さが-50cmの円形ビット（P19）が対応すると考えられる。SI-01・a・2の柱穴としてはP18（深さ不明、柱根確認）、P10（-14cm）、P14（-22cm）の他P06（-29cm）が想定されるが、P06、P09はSI-01・bの主柱穴としても使用されている。壁高は約7cm程残存する。住居内の中央には平面不整円形（径約1.0m）、断面橢鉢状の大型ビット（-0.4m程度）が存在する。穴縁には焼土が小範囲に認められた。壁溝は、SI-01・a・1のものが幅12cm～14cm、深さ5cm～7cm。SI-01・a・2に伴うものが幅12cm～18cm、深さが5cm～8cmを測る。

【出土遺物】この住居址に伴う遺物は残されていない。SI-01・b住居址の建設に際して取り除かれたものと思われる。

【時期】伴出遺物が存在しないため、明確な時期判定はできない。しかし、重複する住居址との関係や平面形等から弥生後期後葉に属する住居址と考えて大過なかろう。

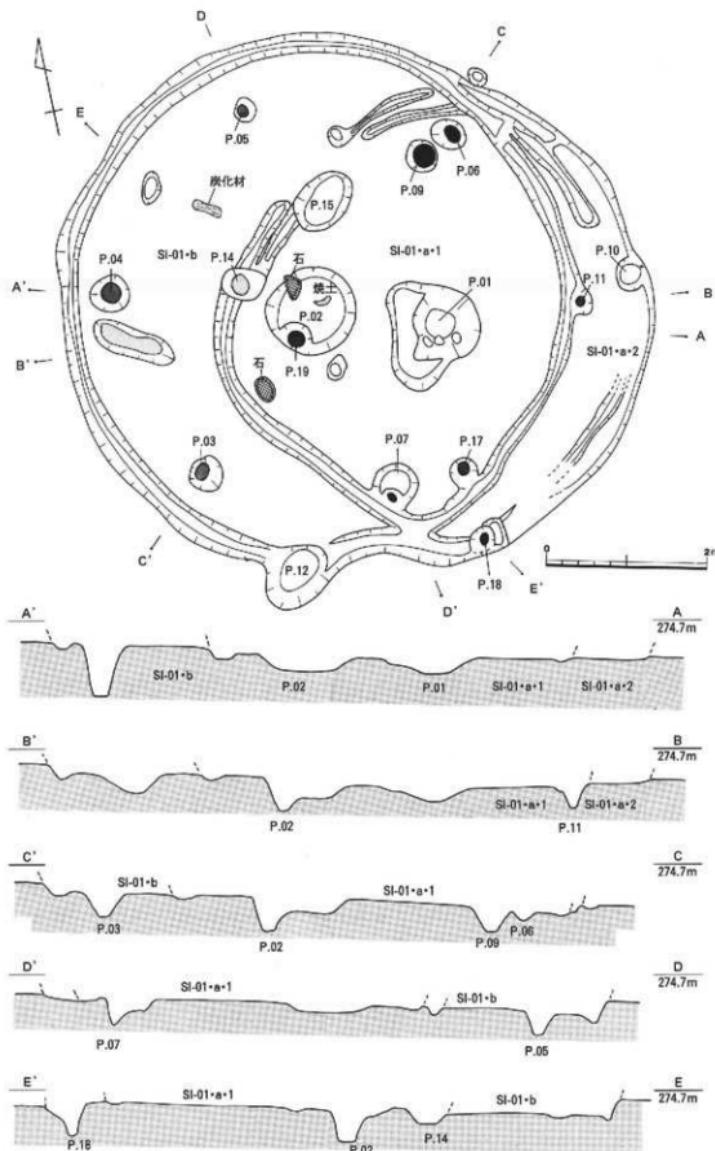
#### ② SI-01・b住居址（第6図、図版第2-1）

【検出状況】SI-01・a住居址の北西側で床面の半分近くを同住居址と重複する状態で検出された。床面のレベルも同一で、重複部分に張り床等による床面の設定は行われていない。

床面上には炭化物や焼土が多く認められ、火災によって廃絶した可能性がある。柱穴にも残留柱根があり、不慮の災害によって倒壊したことが考えられる。床面中央の大型ビットからは甕形土器等が折り重なるような状態をなして集中的に出土している。

【平面形・規模】略正円形の竪穴住居址である。規模は直径6.5m～6.6mを測る。（墻元）。床面積は約34m<sup>2</sup>である。

【施設】主柱穴としては5個のビットが確認できる。P07（-33cm）、P03（-59cm）、P04（-56cm）、P05（-47cm）、P09（-37cm）、がそれで、これらには穴中にいずれも柱根が残存しており、同時性を知る手掛かりを提供している。柱間隔は、2.6m～2.8mである。



第6図 SI-01-a1、SI-01-b住居平面図・断面図

これら5個の柱では東側に広い無柱の空間が生じ、建物としても不安定の感があるのでP11を6番目の柱穴とすれば、問題はある程度解消する。この場合、SI-01・a・1の柱穴を再利用したことになる。

床面中央には皿状の大型円形ピット（径1.0m、一約25cm）が存在する。また、このピットの穴縁には不定形の櫻、ピット西側で台石とみられる円盤状の円躰が検出されている。壁溝は、幅が18cm～28cm、深さは5cm～8cm前後を測る。

#### 【出土遺物】（第7～10図、図版第4-1）

大型の中央ピットや床面直上から多くの土器が出土している。器形が判明したものについて図示し、説明を加える。

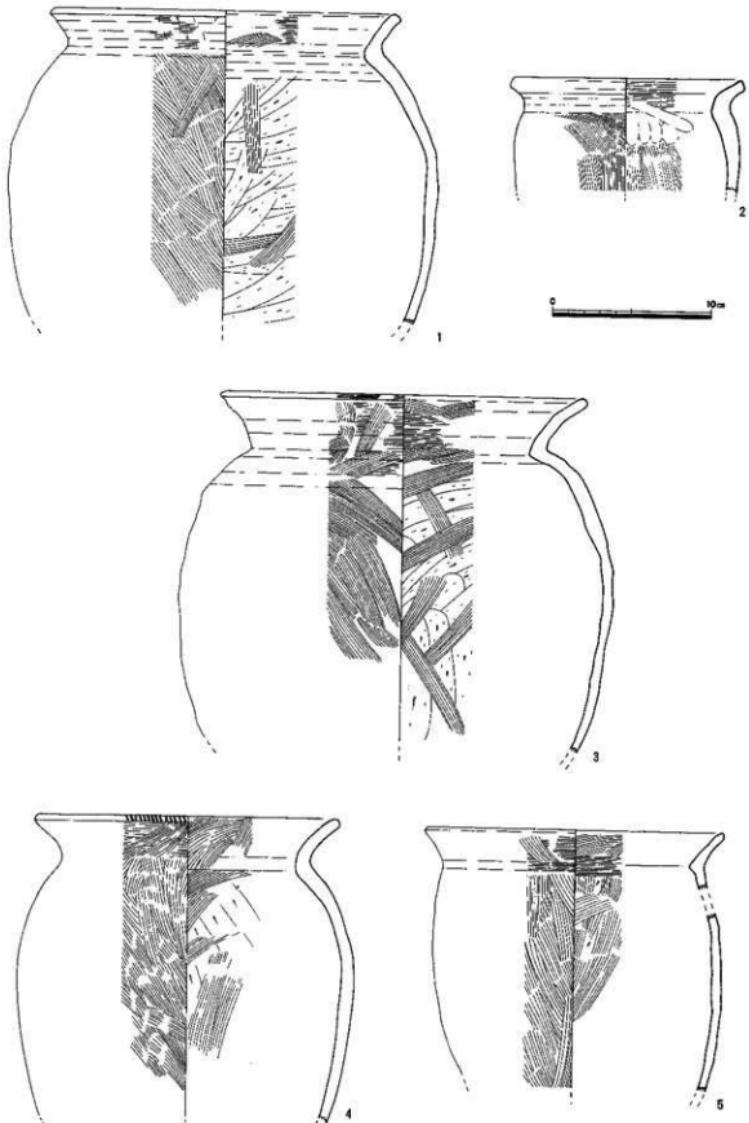
甕形土器：1～14は単純口縁の甕。1は口縁部が逆「ハ」字状に開き、端部を斜め下方に削ぐようにして面をつくる。頸部は「く」字状に屈曲、内面では鋭く「く」字状に屈折している。肩部はわずかに張り気味になる。胴部は橢円形もしくはラグビーボール状をなし、最大径は中位にある。調整は外面口・頸部はヨコナデ、一部にハケの痕跡がみられる。内面調整は口・頸部ヨコナデ、一部ハケ、頸部以下ケズリ、一部ハケである。

2は小型で、口縁部が短く逆「ハ」字状に開き、端部仕上げは1と同様である。頸部は弓状に湾曲し、胴部はわずかに膨らむ。調整は外面口・頸部ヨコナデ、胴部はハケ。内面は口・頸部ヨコハケ、頸部以下タテハケである。3も口縁部が高めで、逆「ハ」字状に大きく開く。頸部は内外面とも「く」字状に強く屈折する。胴部は中位が膨らむ橢円形を呈している。調整は、外面口・頸部はヨコ・ナナメハケ。胴部もナナメハケ。内面口・頸部ヨコハケ、胴部はケズリ、一部ナナメハケの仕上げである。4は口縁部の形状が3に似るが、頸部は「く」字状に屈曲し、胴部があまり張り出さない。外面はナナメ・タテハケの仕上げ。内面は口・頸部はナナメハケ、胴部はケズリ後にナナメハケを施している。口縁端部に浅く連続刻目を施す。5は最大径が口縁部にあり、胴部の張りが小さい。頸部内面が断面三角形状に鋭く突き出るのも特徴的。調整は外面口・頸部、ヨコ・ナナメハケ、胴部がタテハケ、内面口・頸部、ヨコ・ナナメハケ、胴部はケズリ後にハケで仕上げる。

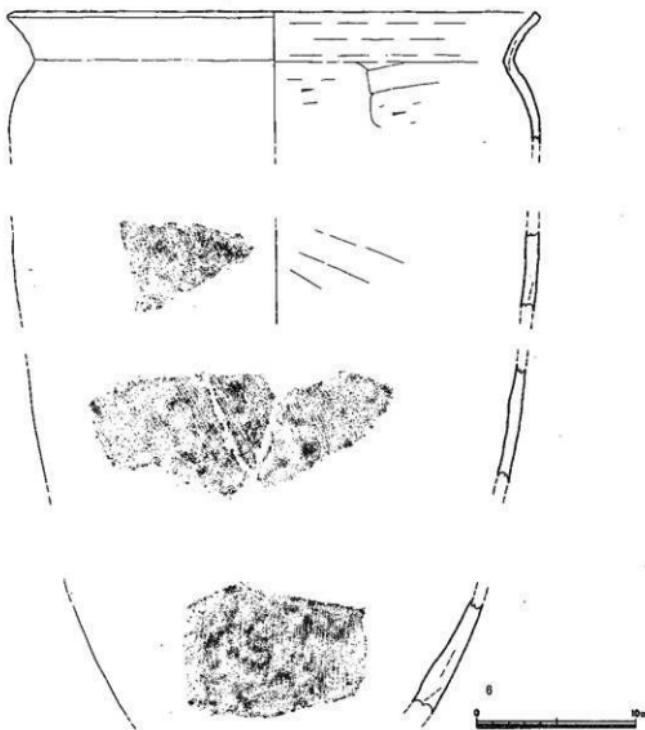
6は長胴の甕。口縁部は逆「ハ」字状をなすが、開きはやや小さい。端部は斜め平坦に仕上げる。頸部がゆるい「く」字状になる。胴部は上位に最大径があり、次第に径を減少しながら下位へと続く。下部は砲弾状にすぼまっている。調整は外面口・頸部ヨコナデ。胴部がハケ。内面は口縁部ヨコナデ、頸部以下はケズリである。

7は、ほぼ完形の長胴の甕である。口縁部は逆「ハ」字状に開き、端部は斜め平坦。頸部が「く」字状に屈曲し、ラグビーボール状の胴部に移行する。底部は平坦である。調整は外面胴部タテハケ後上部をナデ、内面はケズリ後に一部ナデ仕上げしている。口・頸部の調整は不明である。

8～11も頸部が「く」字状に屈曲する甕の口縁・胴部である。頸部の屈曲度はそれぞれ相違するが、口縁端部を斜め平坦に仕上げる点は共通している。8は頸部内面も「く」字状に屈折し、胴部がほとんど膨らまず、11は型が張り気味になる。口・頸部内外面の仕上



第7図 SI-01・a・1、SI-01・b（その1）出土遺物実測図



第8図 SI-01・b出土遺物実測図（その2）

げはヨコナデによっている。12～15は甌の胴部である。

壺形土器：14は小型の壺と思われる。頸部が直立気味になり、胴部が大きく膨らむ。調整は外面がハケ、内面はケズリ、それにハケかナデを加えている。15も大きく膨らむ胴部で、底部付近も球状にすぼまっている。

【時期】壺形土器の1、3～6、9～11等はいずれも中央の大型ピット内から出土しており、住居址の時期を決定する良好な資料といえる。これらは単純口縁で、逆「ハ」字状に開く口縁と端部の仕上げに特徴が認められる。同形の甌は前立山遺跡のSI-10住居址等から出土している。SI-10の土器群は前立山Ⅲ期に属しており、およそ松本石見編年のV-3に相当すると考えられる<sup>1</sup>。さらに、単純口縁・長胴甌は瀬戸内西部の周防地方に色濃く分布しており、1～11のような形状の甌は後期中葉の新段階から後葉占段階に位置づけられている<sup>2</sup>。したがって、本住居址の時期も松本石見V-3頃に相当するとしてよい。

### ③ SI-04住居址（第11図、図版第2-3）

【検出状況】北部調査区B区、SI-02住居址の東約10mの箇所から検出された。北側の壁の一部がSI-06住居址によって破壊されている。また南側においては壁付近で多数の円礫が住居内に流れ込むような状態で検出された。遺物としては、住居址内の覆土から須恵器が3点出土している。床面等からは遺物は検出されなかった。

【平面形・規模】平面形は不整の円形もしくは胴張り隅円方形をなしている。規模は東西3.3m、南北3.1mである。床面積は約48m<sup>2</sup>と算出される。

【施設】床面からは2個のビットが検出されている。P01（-11cm）とP02（-20cm）であるが、その位置や深さから果たして柱穴であったか否か疑問が残る。小規模な住居であるから2本程度の柱で上屋が載せられた可能性もあるが詳細は不明。地床が址らしい焼土、溝も存在しない。検出面から床面の深さは約15cm～20cmである。

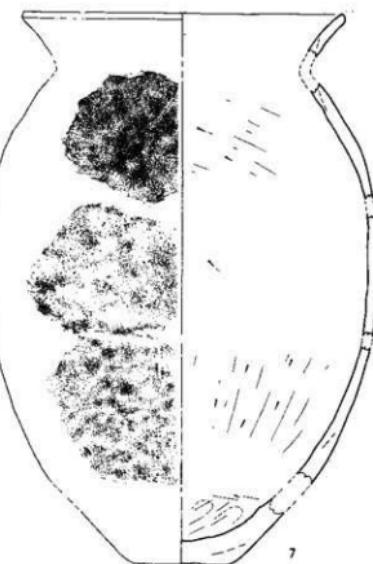
### 【出土遺物】（第12図）

《須恵器》1、2は蓋である。同形同大であるが、口縁部の残る1について述べると、天井部は狭い平坦面をもち、次第に下降しながら体部へと続いている。体部との境は緩い「く」字状をなす。口縁部は「ハ」字状に開き、端部は丸みをもっている。須恵器山陰編年VI期古段階に属するものであろう。3、4は大型の甕の破片である。外面に平行叩き目、内面には同心円状の叩き目がみられる。

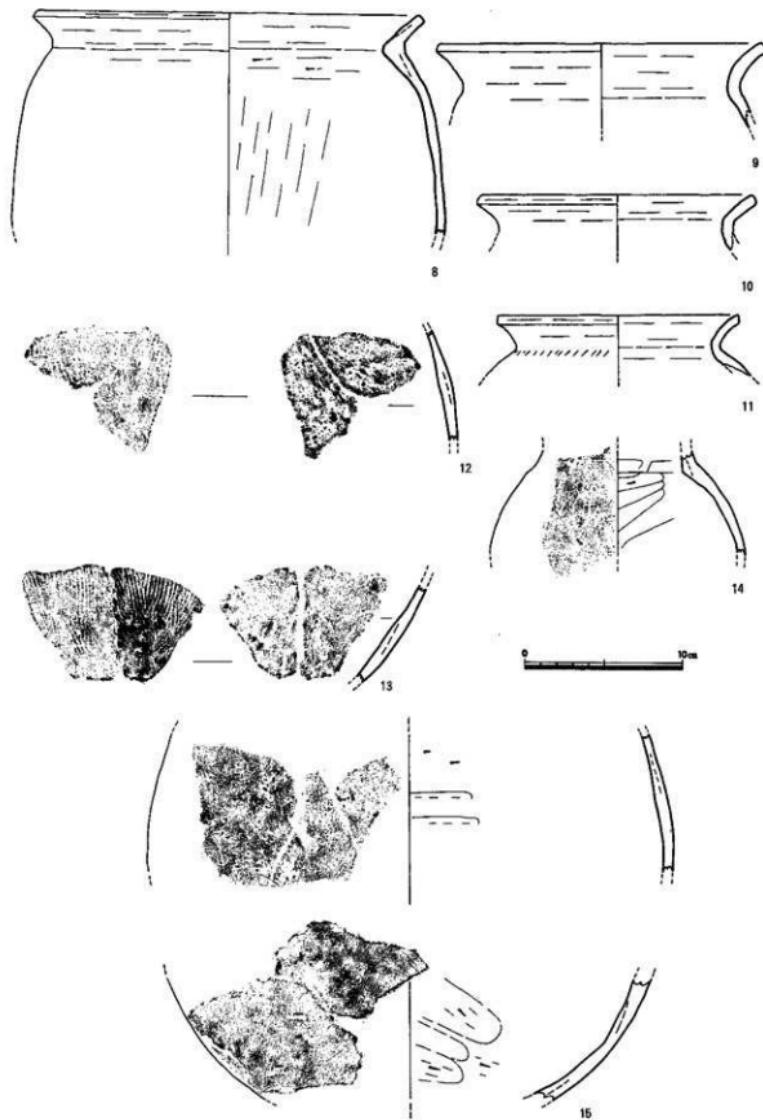
【時期】時期判定の資料としては、北側の壁がSI-06住居址によって破壊されているので、それに先行する住居址であることは明白であるが、より明確な判定はできない。住居平面形からすれば弥生時代後期の住居址の可能性が高い。覆土中の須恵器は、この住居址に重なる形で古墳時代の遺構が存在したことを示す。

### ④ SI-06住居址（第13図、図版第2-3）

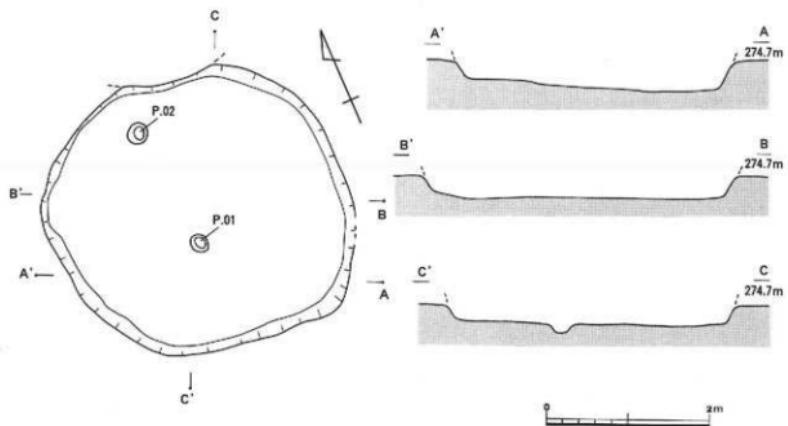
【検出状況】北部調査区B区、SI-04住居址の北側にあり、同住居址の北壁と本住居址の南壁がわずかに重複する状態で検出された。注意されたのは、南壁際には扁平な川原石数



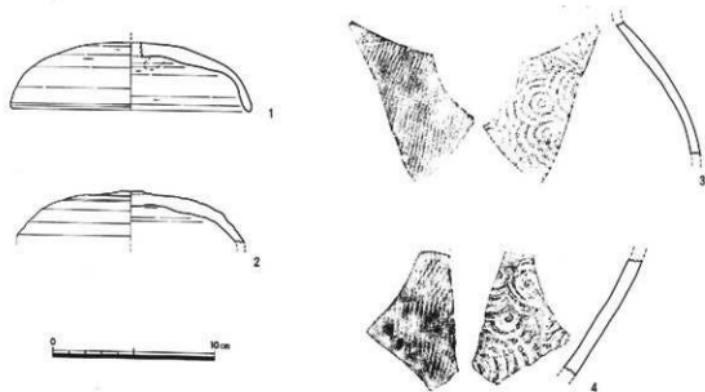
第9図 SI-01・b出土遺物実測図（その3）



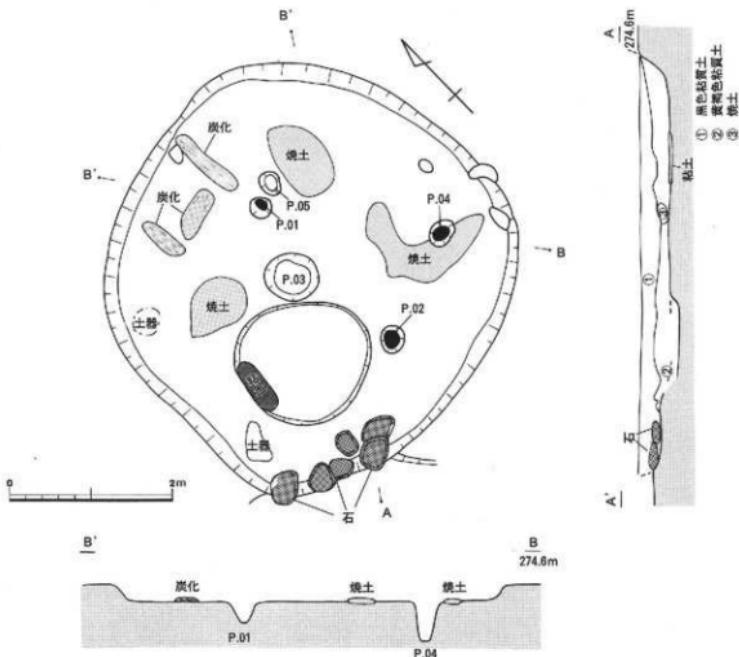
第10図 SI-01・b出土遺物実測図（その4）



第11図 SI-04住居址平面図・断面図



第12図 SI-04出土遺物実測図



第13図 SI-06住居址平面図・断面図

一枚が壁際に一見、横並べさせたような状態で見出されたことである。床面上には焼土や炭化物がかなりの範囲に残されており、本住居址が火災によって廃棄されたことをうかがわせた。とくに注目すべきことは、壁際に炭化した杭根が立ったままの状態で検出されたことである。

遺物としては、床面から弥生土器、覆土からは土師器、須恵器が出土している。

【平面形・規模】不整形円形もしくは同張り隅円方形と思われる。規模は、円形基調の住居とすれば、径（壁元）4.6cm～4.7cmとなる。床面積は16.6m<sup>2</sup>である。隅円形とみれば、一边が約3.6mと計測される。面積は円形の場合とほぼ同程度であろう。

【施設】床面からは柱穴らしいピット3個と大型の楕円形・皿状ピットが検出されている。これらの中、P01（-25cm）、P02（-20cm）、P04（-25cm）は、その位置と穴の深さから主柱穴の可能性が高い。P05（-13cm）も位置からは主柱穴と見られなくもないが、近接するP01と比較すれば、深度が浅いので排除する。但し、補助柱穴とすることもできるが、積極的な根拠はない。

大型ピット（径2.2m×1.6m、-25cm～-30cm）は、その位置が南側に偏っていることと、床面全体に対して不相応に大きいことから本住居の施設とは認め難い。むしろ、この大ピットに近接するP03（径約70cm、-12cm）が位置、形状、深さから本住居に伴う中央ピットの可能性がある。壁高は高い箇所で30cmを測った。壁溝は検出されなかったが、壁際に杭根が残っていたことから壁面には土止めのための板張りか茅・藁等の壁体施設があったことが推定される。この杭はそれらを支えるために打ち込まれたのであろう。

#### 【出土遺物】（第14～15図、図版第4-2、5-1）

出土遺物には弥生土器と土師器・須恵器、磁石、石皿等がある。弥生土器は甕・鉢・壺・高坏。須恵器は高坏がある。

#### 《弥生土器》

甕形土器：1は長胴甕である。口縁部は短く逆「ハ」字状に開き、端部は垂直面をなす。頸部は「く」字状に強く屈曲し、なだらかな上胴部へと移行する。胴部は膨らみが小さい壺形をなしている。調整は、口縁端部に強いナデ、外面口・頸部から肩部がヨコナデ、それ以下はタテハケとなる。内面は口・頸部がナナメ、ヨコハケ、胴部がケズリ後に一部ハケ仕上げとなる。2、3は甕の口縁～上胴部片である。2は厚めの器壁で、口縁部が外反気味に開き、端部はやや丸味をもっている。頸部は「く」字状に屈折し、上胴部は「ハ」字状になる。3も厚めの器壁で、口縁部は逆「ハ」字状に開き、頸部は弓状に湾曲する。胴部はほとんど膨らまない。外面はタテハケ、内面は口縁部ヨコナデ、頸部以下がケズリである。6～9は甕の胴部片である。外面はハケ仕上げであるが、ハケ後にナデを施した可能性がある。内面は8がケズリ、その他はハケで仕上げている。とくに7はナナメハケとヨコハケを交互に丁寧に施しているのが注目される。

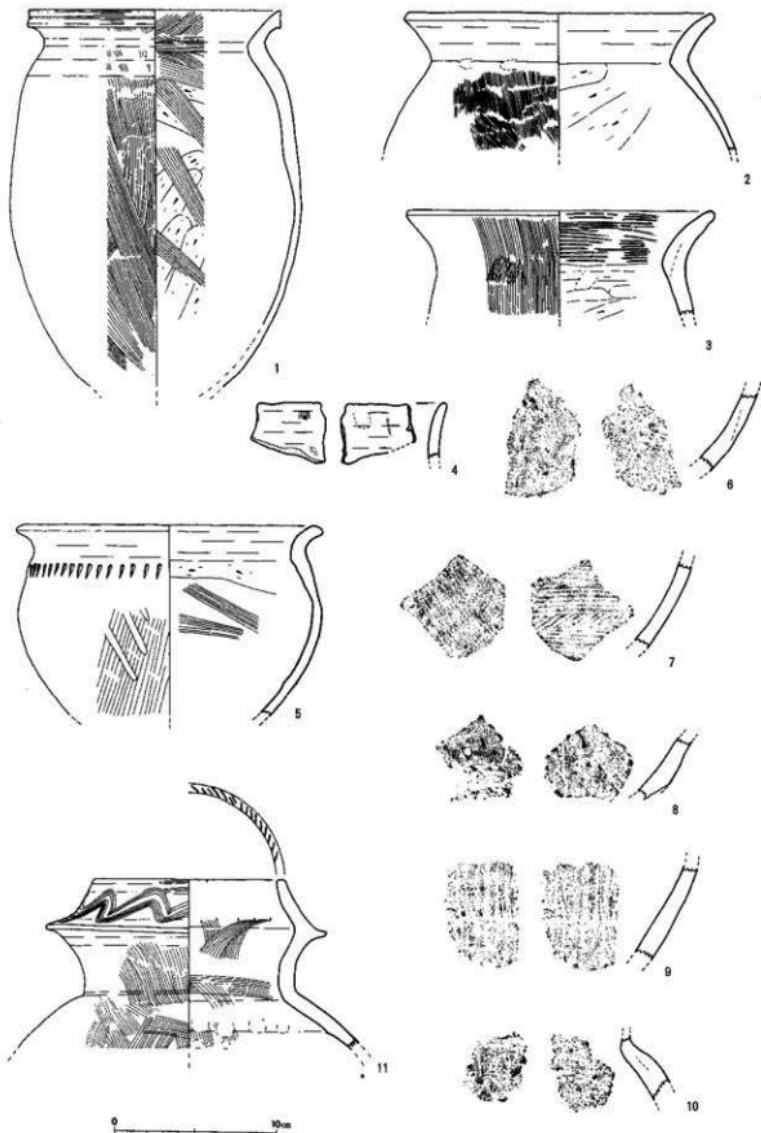
12は山陰系の甕である。複合口縁で、口縁部は逆「ハ」字状に開き、端部を尖り状におさめる。複合部は水平方向に鋭く突出し、頸部が「く」字状に屈曲する。胴部は倒卵形をなすとみられる。

鉢形土器：5は口縁部が短く、強く外反し、端部を斜め平坦につくる。頸部は弓状に湾曲し、胴部はゆったり膨らむ。最大径が胴部の上方にあり、下半部は擂鉢状にすぼまると思われる。調整は、外面口・頸部ヨコナデ、胴部ハケ。内面は口・頸部ヨコナデ、ケズリ一部ハケとなる。外面肩部には連続刺突文が施される。

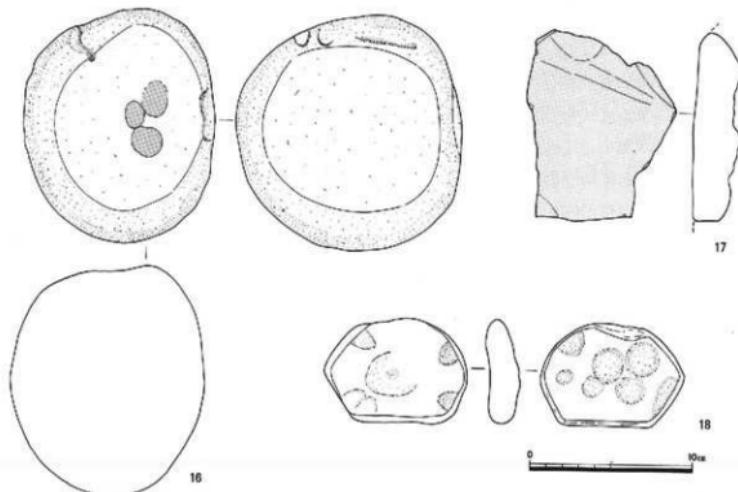
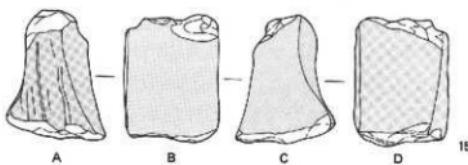
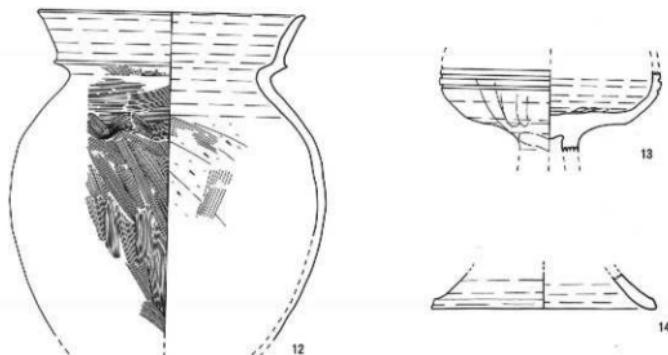
壺形土器：4、10は直口壺片と考えられる。4はやや薄い口縁部片、10は厚目の器壁で、頸部から肩部の破片である。11は、いわゆる「袋状」の二重口縁の壺である。口縁部は強く内傾し、複合部は瘤状に大きく突出している。頸部は漏斗形で、上胴部は「ハ」字状に開く。口縁部にはハケ工具による波長幅の広い波状文が施され、頸部以下はハケ仕上げになる。内面調整は、口縁部ヨコナデ一部ハケ、肩部を指頭による抑え、以下はハケで仕上げる。

高坏：14は高坏の脚裾部の破片と思われる。喇叭状に開き、端部を垂直面に仕上げる。

#### 《須恵器》



第14図 SI-06出土遺物実測図（その1）



第15図 SI-06出土遺物実測図（その2）

高坏：13は高坏の坏部である。口縁部を欠損するが、やや平坦な底部から湾曲して立ち上がる体部で、口縁部は直立するものと思われる。体部に2条の太い平行沈線が見られる。14は高坏の脚端部片。大きく「ハ」字状に開き、端部は狭い直立面をもつ。

#### 《石器》

磁石：15は磁石片。直方体状の長いものの断片と思われる。四面すべて研ぎ面として使用されているが、左右面はとくに使い込まれて、大きく弓状にくぼんでいる。

石皿：17は大型の石皿片である。同一固体の破片数個が出土している。おそらく大型の磨り石を破碎し、石材として利用したものであろう。その破片一個を図示した。平らな一面は摩滅跡が残っている。反対面は破壊面。18は小型で扁平な川原石を利用したもの。

16は、須恵器や磁石等とともに検出された幼児の頭大の球石である。上方の一部に自然面が残るが、他はすべて打撃を加えて球状に仕上げる。用途は不明。

【時期】弥生土器の1、5、11が住居内南側の床面から出土しており、これらが本住居址の時期を示すといえる。1は類例の乏しい器形であるが、端部に垂直面をつくる手法は前立山IV期頃の甕に認められる。また、短く、逆「ハ」字状に聞く口縁に巻玉形の胴部がつく甕は伊藤実氏が安芸V—4比定している<sup>a</sup>。5は京野遺跡SX29出土の鉢に類似している<sup>b</sup>。5のプロポーションを子細に見ると、前立山SI13住居址出土の鉢にも似るが、口縁部のつくりは京野例に近く、このことから5を京野例と前立山SI13例の中間に位置づけることができるようと思われる。

次に11の甕について検討する。この種の甕は瀬戸内西部に分布圏がある。本例は口縁部が高く大きく内傾し、外面に波状文を施している。これを山本一朗氏の「山口県東部（周防）弥生後期土器編年」に照らすと「後期中葉から後葉」段階に比定できる<sup>c</sup>。

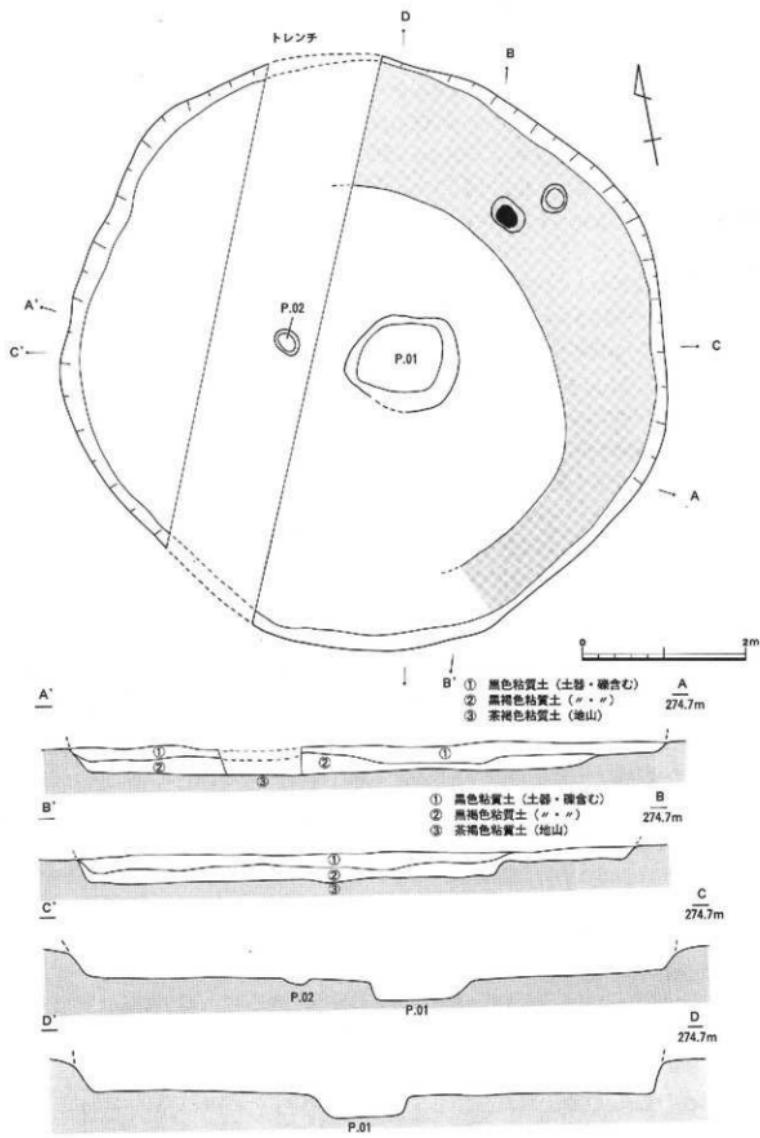
今一つ検討を要するのは12の山陰系の甕である。この甕の口縁部や複合部のつくりは松本石見編年V—4に特徴的に見られる<sup>d</sup>。

以上の検討から、これらの土器群は松本石見編年V—4の頃に属するとしてよく、本住居址の時期も後期後葉期に求めることができよう。なお、13の須恵器の高坏であるが、これは山陰の須恵器編年のIII期新段階もしくはIV期古段階に比定されるものである。おそらくは、弥生後期に属するSI-06住居址の上部に古墳時代後期の遺構が重複した結果と考えられる。磁石、その他の石器等も古墳時代遺構に伴うか、混入したものと判断される。

#### ⑤ SI-08住居址（第16図、図版第2-4）

【検出状況】南部調査区C区、SI-07住居址の東4mの個所で検山された。その存在は東西トレンチに直交する小トレンチによって確認されたものである。住居の遺存状況は比較的良好であった。壁の検出作業において、東側半分では壁際から内側に幅約1.5m程の平坦な高まりが帯状に広がっていることが注意され、後日これが、いわゆる「ベッド状遺構」であることが判明している。その他、中央床面と西壁際に扁平な川原石が置かれていた。

遺物は、住居址内覆土中から多数の弥生土器片、白磁、磨石等が得られた他中央床面上で弥生土器の甕の胴下半分と鉄器が検出されている。



第16図 SI-08住居図面図・断面図

【平面形・規模】ほぼ正円形の住居址である。直径は、壁元で7.1m、壁の上端で7.3m前後を測る。平面の面積は、「ベッド状遺構」部分を含めると38.6m<sup>2</sup>、床面積は約26m<sup>2</sup>となる。壁高は高いところ（検出面下）で30cm強であった。

【施設】床面からは3個のピットが検出された。P01は中央ピット（-39cm）である。長方形状（140×120cm）を呈する。P01に近くP02（-17cm）がある。P03（-39cm）は北東壁近くに掘られ、これと並んで浅いピットが検出されている。P02は中央ピットに伴う構築物の杭穴の可能性がある。P03は柱穴であろう。柱穴1個、しかも壁よりに偏った位置にあり、これ一個で上屋が支えられたとは考え難いが、調査段階では少なくとも、これ以上の柱穴は確認しえなかった。

この住居址で確認された「ベッド状遺構」は、東壁に接して半月状に構築されている。さらに北西部や南部にも延びていた可能性はあるが、確認できなかった。「ベッド」の幅は最大箇所で1.8mを測るが、東側辺りはやや狭く、平均して1.5m前後である。高さは床面から20cm程高い。上面は床より柔らかい。東壁際から検出された扁平な川原石は入り口の踏み石かと思われる。また中央ピットの脇の川原石は台石の可能性があろう。

住居外の南側でも2個のピットが検出されている。いずれも浅いもので、本住居に伴うものかどうか不明。

#### 【出土遺物】（第17図、図版第5-2）

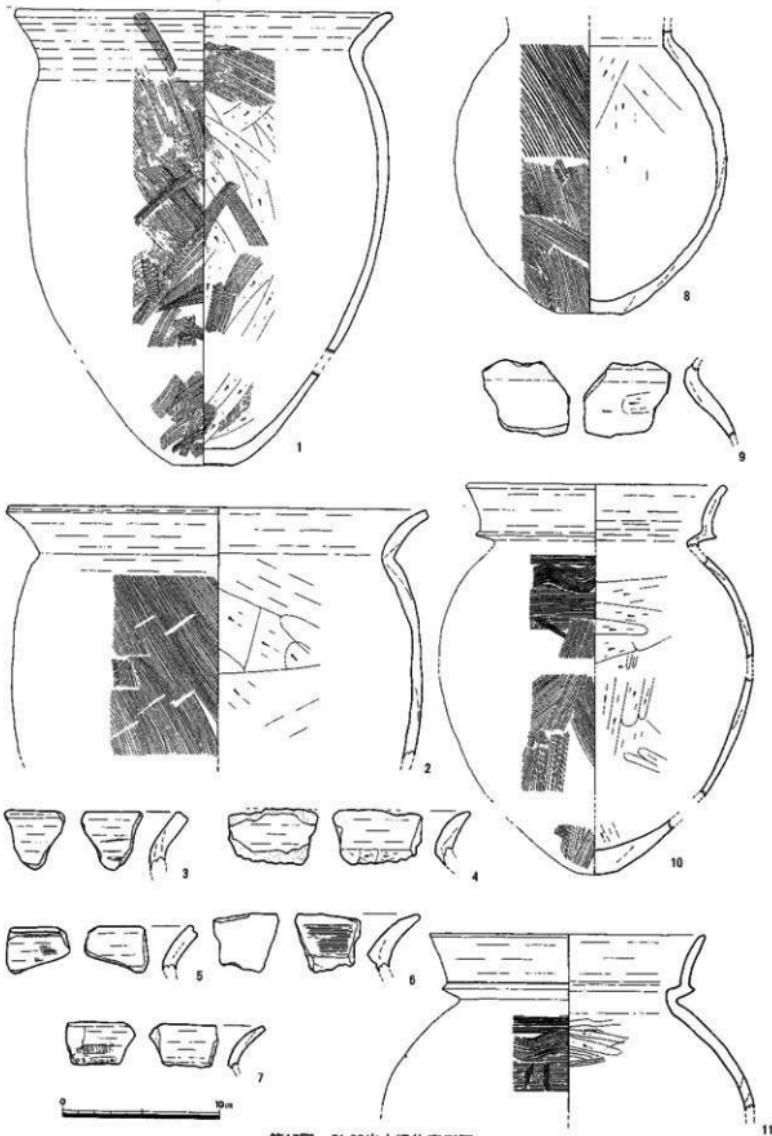
出土した土器は弥生土器の甕と壺である。その他に白磁と鉄器も出土した。

#### 《弥生土器》

甕形土器：1は胴長の甕。単純口縁で頸部がゆるく「く」字状に屈曲し、逆「ハ」字状に開く口縁へと移行する。端部は丸味をもつ。胴部はわずかに膨らみ、小さく内湾して底部に至る。底部は中央が少しくぼむが平坦の範囲。最大径は口縁と胴部中位にある。調整は、外面口縁～頸部ヨコナデ、胴部が粗いハケ。内面は口縁部ヨコナデ、頸部以下タテ方のケズリ後部分ハケ調整している。2も1とほぼ同形同大の長胴甕。頸部が「く」字状に屈折し、口縁部は外反気味に開く。端部は平坦になる。調整は外面1と同じ。内面は胴部がケズリ放しになっている。4～7は単純口縁の甕の口縁部片。端部の仕上げに平坦気味のもの（3、5、7）と尖り気味で丸味をもつ（4、6）がある。8は甕形の胴部の壺である。平坦で、外面ハケ、内面ケズリ調整している。9は壺上部片。内面頸部以下を強くケズル。

10、11は山陰系の複合口縁の甕である。10は外反気味のやや高い口縁部で端部を平坦におさめ、複合部は水平方向に鋭く突出している。胴部は倒卵形で、底部は小さな平坦になる。上胴部にハケ工具による多条の平行沈線文と波状文が重なっている。胴部中位以下ハケ。内面は口・頸部ヨコナデ、頸部以下はケズリ調整となる。11は逆「ハ」字状に開く口縁で、端部は引き出されたように尖る。複合部は太く、鋭くヨコに突出し、頸部は「く」字状に強く屈折している。胴部は球形を呈するか。調整は、外面が口・頸部ヨコナデ。上胴部には10と同じような平行沈線文・波状文が見られる。

《白磁》12は白磁碗の下部片。高い高台が付いている。中国産で太宰府編年V類に比定。



第17図 SI-08出土遺物実測図

《鉄器》長さ5cm程の細長い板状の鉄器。器種は特定できない。

【時期】本住居址の時期を決定する資料としては中央ピット上から検出された8の甕がある。これはSI-06出土の5の甕に似る。1から7の単純口縁の甕は、先述のように、山本一朗氏が弥生後期後葉に位置づけられているものである。10、11の山陰系の甕も松本石見編年V-4に含まれるもので、邑智町沖丈遺跡では布留傾向甕を伴う弥生最終末段階の土器群に見られるタイプである<sup>4</sup>。

以上を総合すると本住居址は弥生後期も終末の頃に營まれたとすることができる。白磁は、混入したものであるが、平安時代の沖場遺跡の性格を考える上では看過できない遺物といえよう。

#### ⑥ SI-09住居址（第18図、図版2-5）

【検出状況】南部調査区D区で、SI-08住居址の南東31mの個所で検出された。存在を確認した段階では、概略、円形を描くラインを捉えることができたが、床面を追求する過程で壁の立ち上がりの不明確な個所があり、結果的には不整円形のプランを検出することになった。

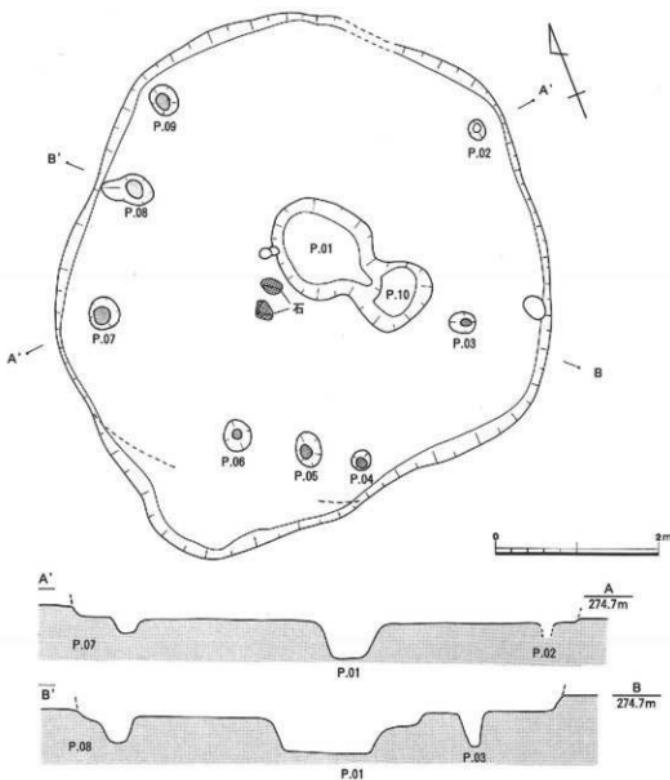
遺物としては、床面のほぼ中央で完形の甕が出土し、その他甕の口縁部片等がえられている。また、覆土からは擂鉢片、磁石、鉄器等が検出された。

【平面形・規模】平面形は不整円形を呈するが、他の円形住居址に照らせば、本来は円形住居であったとすべきであろうか。ただ、柱穴と見なされるピットの並び方や、壁線の円弧の描き方を子細に検討すると、あるいは多角形住居址となる可能性もある。円形住居とすれば、規模は円弧状になる壁のラインから推定でき、東壁際には残されていた粘土塊と西壁際のP09の間隔も参考になる。それからすれば径は約6mと復元できる。床面積は28.3m<sup>2</sup>。

【施設】ほぼ水平をなす床面上には11個のピットが存在する。P01(128×120cm、-46cm)は中央ピットである。平面は不整楕円形を呈する。長軸は北西—南東方向であるが、同一軸線上で南東側には、楕円状のP10(100×70cm、-20cm)がP01と重複して検出されている。軸は北東—南西である。両者の新古関係は明らかにしえなかつたが、住居の中心が北西方向にずらされたか、または2棟の住居址が複合的に築造されたことも考えられる。

柱穴と見られたのはP04(-49cm)、P05(-13cm)、P06(-30cm)、P07(-41cm)、P08(-18cm)、P09(-40cm)である。P05～P09は壁沿いに並んでいる。しかし、穴間隔はP05～P07とP08～P09とでは異なっている。P03は中央ピットに接しており、形状、深さから柱穴と考えられるが、壁沿いのピットとの関連は不明である。他のピットは深さ5～18cmで、柱穴かどうか判定できない。

以上の検討からは、本住居址では主柱穴らしきものを特定できない。太い垂木を壁沿いの柱列に架けて上屋を支える構造であったのかもしれない。



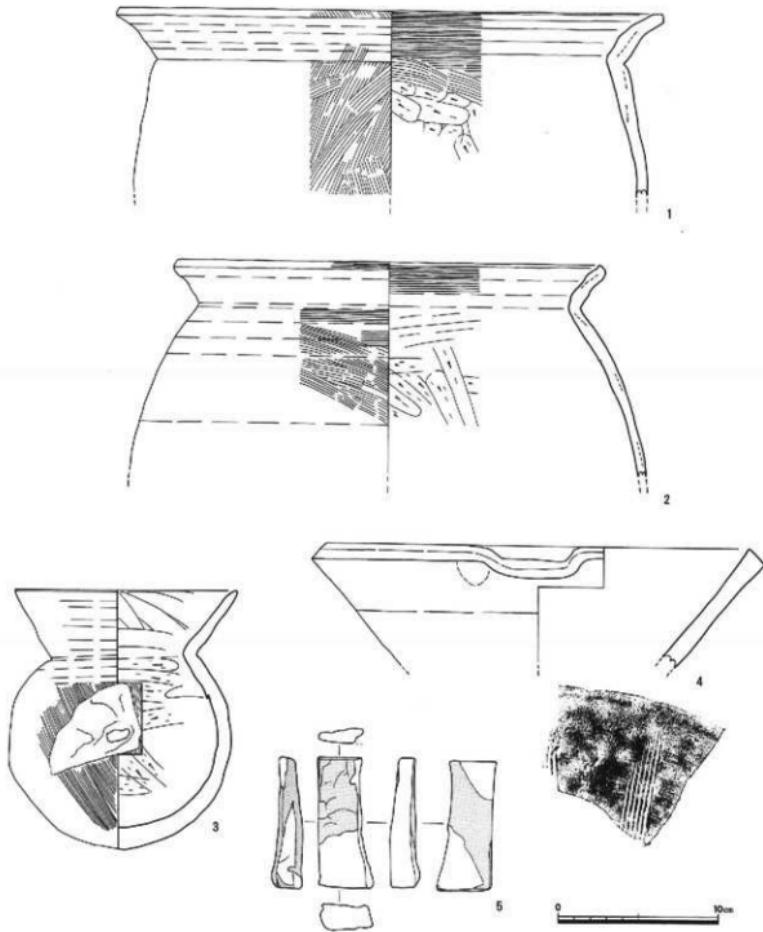
第18図 SI-09住居平面図・断面図

【出土遺物】（第19図、図版第6-1）

出土遺物としては弥生土器の甕と壺、擂鉢、砥石を図示する。その他に鐵器がえられて  
いる。

《弥生土器》

壺形土器：1は胴長の甕。単純口縁で外反気味に大きく逆「ハ」字状に開き、端部は平  
坦にしている。頸部は「く」字状に屈折し、胴部はあまり張り出さない。最大径は口縁部  
にある。調整は外面が口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後一部ナデ。内面は口縁部が強いヨコナ  
デ頸部もヨコハケ、以下ケズリとなる。焼成はやや不良。2も胴長の甕。単純口縁で口縁



第19図 SI-09出土遺物実測図

部は短く逆「ハ」字状に開く。端部は平坦面をもつが、内面の角を内傾気味にわずかに引き出している。頸部は「く」字状に屈折し胴部は緩く張り出す。最大径は胴部中位にある。口縁内外はヨコナデ、頸部外面ヨコハケ後ナデ、内面はヨコナデ。胴部は外面ハケ、内面ケズリの調整となっている。

壺形土器：3は単純口縁の小型壺である。口縁部は逆「ハ」字状に開き、端部は引き出したようにして尖らせている。頸部は「く」字状に屈折し胴部は楕円形をなしている。底部は丸底となる。最大径は口径と胴径中位にあり、ほぼ等しい。口縁部内外面の調整はヨコナデと見られるが、詳細は不明。胴部は外面ハケ、内面ケズリとなる。胴部中位に焼成後の穿孔がおこなわれている。焼成はやや不良である。

《擂鉢》4は備前焼の擂鉢である。体部は外傾して逆「ハ」字状に開き、口縁端部は平坦になるが、やや拡張される。口縁上に片口状の窪みが見られる。内面即目は6条一単位で施されている。

《砥石》長細い長方形状と方形状の2個が検出されている。5はその一つで、かなり使い込んだ形跡がうかがえる。

《鉄器》5cm前後の棒状鉄器。錫化がひどく、器種は特定できない。

以上の他に、東壁際から検出された粘土塊がある。長径36、短径24、厚さは20cm程度である。土器製作の原料であろうか。

【時期】1～3の土器が本住居址の時期決定の資料となる。1、2の甕は長胴甕であるが、口縁部、胴部のつくりが異なっている。前者に類似する甕は前立山遺跡SI13、SI19から出土している。後者の甕で注目されるのは、口縁端部の内角を内傾気味に小さく引き出している点で、このような仕上げは布留傾向の甕に特徴的に認められている。あるいは、口縁端部の外角を小さく斜め下方に引き出す手法も布留傾向甕に見られるが、そうした甕も左記のSI13等の出土甕中に存在している<sup>4</sup>。

3の壺形土器は、一見小型丸底壺の類品かともみられるが、やや大型で器壁も厚い。これに近似する壺は山口県清水遺跡第2環壕等で出土しているが、わずかに平底の痕跡を残している点が本例となる。山本一朗氏によれば、周防地方で丸底状の壺類が出現するのは、山本編年の「移行期」(庄内併行)とされている<sup>5</sup>。これらを参考にすれば、3の壺は弥生時代終末期に位置づけることが妥当であろう。

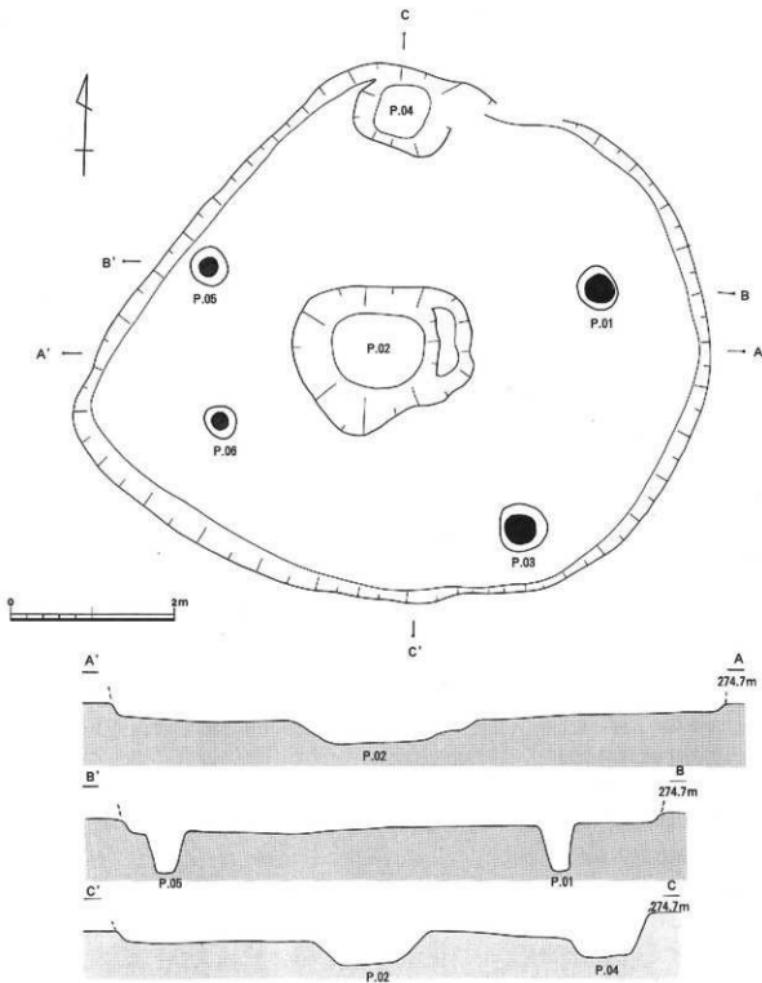
以上の点から本住居址の時期は弥生時代終末期にあるとすることができる。

#### ⑦ SI-10住居址(第20図、図版第2-6・7)

【検出状況】南部調査区D区、SI-09住居址の北30mの個所で検出された。円形の黒褐色土の落ち込みを確認して掘り下げる、捉えた住居址である。床面上には炭化物や焼土が広がっており、火災によって放棄された住居と思われる。全体として東～南側の壁は良好な状態で検出することができたが、西側では明確に捉えることはできなかった。

遺物としては、中央より西寄りにおいて床面上に横倒し状になった甕3個以上を含む土器群が出土している。その他、複合口縁の壺等が検出された。

【平面形・規模】当初、確認された円形の黒褐色土の落ち込み状態、東～南壁が画く壁の弧線からは円形ないし胴張隅円長方形の住居址と考えられる。円形の場合は径約7.0～8.0m、胴張隅円長方形とすれば約8.0×6.0m程度が考えられる。壁高は、もっとも高い個所で20cmを計測した。床面積は最大で約50m<sup>2</sup>と算定される。



第20図 SI-10住居址平面図・断面図

**【施設】**床面のほぼ中央に掘られた大型の皿状ピットP02 (220×160cm、-50cm) がある。隅円長方形で長軸が東西方向になる。東側は底が2段になっている。P01 (-43cm)、P03 (-13cm)、P05 (-41cm)、P06 (-46cm) は、その位置と形状から主柱穴と考えられるが、P03はやや浅い。P04 (-43cm) は深さが主柱穴のそれに等しいが、位置的に柱穴とはし難い。中央ピットの東側と北側には厚く扁平な大型の川原石が検出されているが、床面の基盤層に包含された石が露出した可能性も否定できないが、据え置かれた台石として利用されたことも考慮すべきであろう。

**【出土遺物】** (第21図、図版第6-2)

出土遺物としては弥生土器の甕と小型の鉢を図示する。

**《弥生土器》**

甕形土器：1は長胴甕である。逆「ハ」字状に開く単純口縁で、端部は斜め平坦になる。その内角が上方向にわずかに尖っている。頸部は「く」字状に屈折、胴部は弓状に張り出している。最大径は胴部中位にある。調整は、外面が口縁部ヨコハケ、頸部以下タテハケ。内面は口・頸部ヨコ・ナナメハケ、胴部はケズリ後一部ハケを施している。2も長胴の甕である。逆「ハ」字状に短く開く単純口縁で短部は下方に削ぐようにして斜め平坦面をつくっている。頸部は「く」字状に屈曲し、胴部の張りは小さい。最大径は口縁と上胴部にある。調整は口縁部ハケ後ヨコナデ、頸部ヨコナデ、胴部タテハケ。内面は、ハケ後ヨコナデ、頸部以下はケズリ、一部ハケを施している。3も長胴の甕。短い単純口縁がやや外反気味に開く。短部の仕上げは2に似ている。頸部は「く」字状に屈折し、胴部は張り気味になる。内外面をハケで仕上げる。

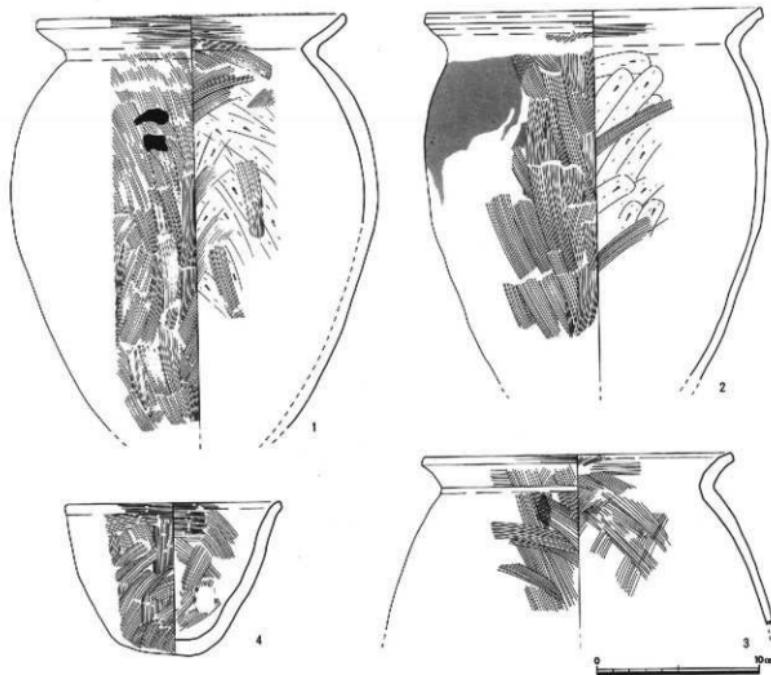
鉢形土器：4は胴部から口縁部にかけて逆「ハ」字状に開く鉢。端部付近は小さく外反する。底部は不安定な平底。内外面ともハケで仕上げている。

**【時期】**1～4の土器は住居内西側で床面から一括状態で出土している。1～3の長胴甕に共通する特徴としては、口縁端部の仕上げ方と胴部内面の調整方法がある。1は口縁端部内角を上方向に小さく引き出し、尖らす手法が見られた。2、3では同じく端部を削ぐようにして平らな斜面をつくっていた。1の口縁端部の仕上げ方が布留傾向甕口縁部の仕上げ法の影響下にあるとすれば、1の時期は自ずと限定されることになる。2、3の場合も同様な口縁端部仕上げ方は、例えば前立山SI14住居址の覆土からえられた甕に認められる。SI14覆土の土器群は前立山IV期に属すると考えられ、参考となる。4の鉢については類例が乏しい。あえて求めれば、前記清水遺跡第16号段状遺構出土の「甕」が近似する形状を有している。この「甕」は後期後葉～終末とされている\*。

以上の検討から本住居址の時期は弥生後期でも終末の頃とすることができる。

**⑧ SI-11住居址** (第22図、図版第2-8)

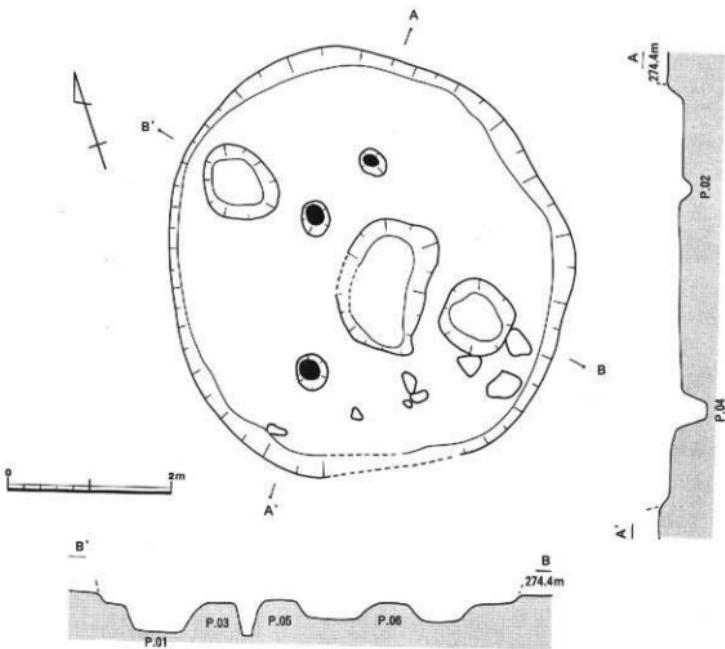
**【検出状況】**南部調査区D区で、SI-10住居址の東1mの個所から検出された。直径約5m程度の範囲に円形の落ち込みが認められて存在が明らかになったものである。発掘の結果、壁線のほぼ全体を捉えることができた。遺物は床面に接して甕、高环等を検出している。



第21図 SI-10出土遺物実測図

**【平面形・規模】** 平面形はほぼ円形を呈する。壁元では南北4.8m、東西4.6mを測ることができる。中央ピットの長軸の向きからすると南北に主軸が置かれたと考えられる。壁高は最後部で30cm。床面積は15.6m<sup>2</sup>と算出される。

**【施設】** 居住の中心部にあるP05 (1.6×1.1m, -17cm) が中央ピット。北北東—南南西に長軸をもつ不整橢円形である。その他、床面上で5個のピットを検出したが、柱穴としてよいのはP02 (-37cm)、P03 (-35cm)、P04 (-39cm) の3個である。これらは中央ピットに近接して並んでいることから主柱穴としてよいかには疑惑もある。補助的柱の可能性を考慮すべきかもしれない。P03とP06 (-40cm) は中央ピットを挟み、長軸と直交する対称的な位置にあり、深さもほぼ等しいことから主柱穴とみることもできる。この場合は2本柱の建物が想定される。その場合は中央ピット付近の柱穴が補助的な柱ということになろう。



第22図 SI-11住居址平面図・断面図

【出土遺物】（第23図、図版第6-3）

出土土器の量は多いが、器形が判明するものは少なく、以下数点を図示する。

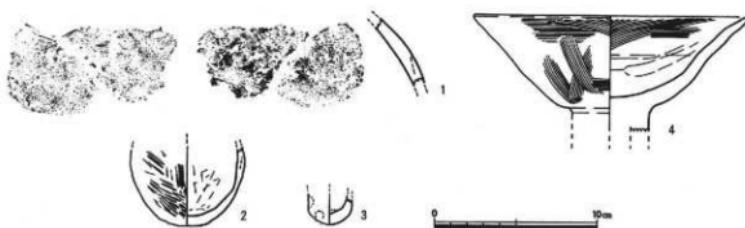
《弥生土器》

変形土器：1は長胴甕の上胴部片。外面ハケ、内面ケズリ仕上げである。

鉢形土器：2～3は手捏ねの小型鉢。長胴で、底部は丸味をもつ。

高坏：4は高坏の坏部。やや外反気味に大きく開く体部で口縁部は薄く引き出すように整え端部は丸味をもたせる。内外面ともハケ仕上げである。

【時期】本住居址の時期については4の高坏によってうかがうことができる。この高坏の類品は前立山遺跡SI-13住居址床面から出土している。口縁端部の仕上げ等細部に異同はあるが、4と同時期のものとしてよいであろう。前立山SI-13の土器群はIV期に属し、弥生後期の終末に位置づけられている。本住居址は弥生時代後期も終末頃のものといえる。



第23図 SI-11出土遺物実測図

⑨ SI-12住居址（第24図、図版第3-1）

【検出状況】南部調査区D区で、SI-11住居址の南東1.5mの個所で検出された。最初円形と方形状の落ち込みが重複したような状態で確認されたため、2棟の住居址が複合している可能性があると見られた。しかし、南西部の三角形状の落ち込みは住居址ではないことが判明し、SI-12を単独の住居址として検出作業を行った。壁線はほぼ円形を画き、壁の保存状況も比較的良好であるが、南東部は多くの礫混じり土層のため、壁面が不明瞭であった。三角形状の落ち込みは、円形部分と重なり、ピットを伴っていることから、何らかの構築物が存在したことは確かである。それが住居の張り出し部か、または先行する遺構かは明らかにできなかった。

遺物としては、弥生土器、砥石等が検出された。

【平面形・規模】平面形がほぼ円形の住居址である。壁元では径南北4.4、東西4.2mを計測することができる。床面積は15.2m<sup>2</sup>になる。

【施設】円形住居の床面には4個のピットがある。P01 (1.05×0.9m、-12cm) は中央ピットで南北に主軸を置く梢円状を呈している。柱穴としてよいのはP02 (-43cm) である。P03 (-14cm) は壁際にあり、やや浅く、主柱穴とは考えられない。すると主柱穴は確認された限りでは1個となるが、中央ピットを挟んでP02と対称的な位置にあるP04 (-10cm強) を主柱穴とすることもできよう。隣接するSI-11と似た構造を想定すればよい。壁高は、最高部で34cmを測ることができる。

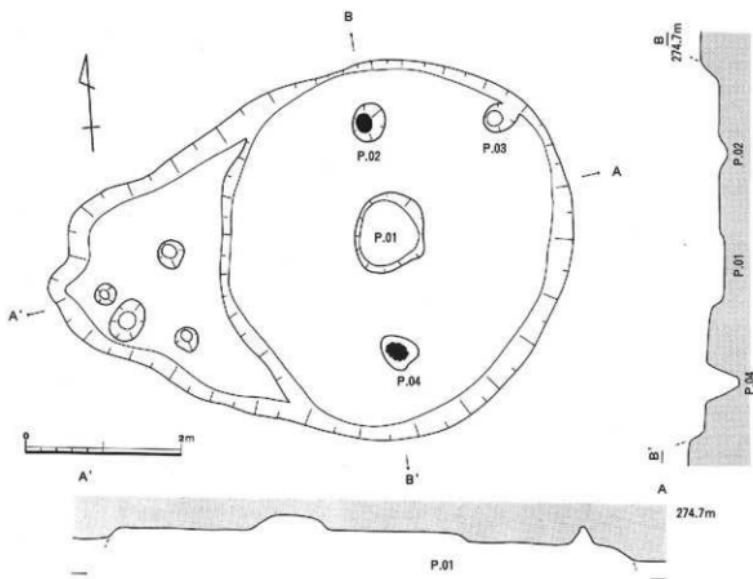
南西部にあたる三角形状の遺構については、平面形、ピットの分布等に何らかの建物と見なしうる要素は見出しがたい。強いて、住居の張り出し部と想定しないこともないが、積極的な根拠はない。

【出土遺物】（第25図、図版第7-1）

出土した弥生土器は甕、壺、鉢、高杯、坏である。

《弥生土器》

甕形土器：1は口縁部が短く逆「ハ」字状に開く単純口縁の甕。頸部は「く」字状に強く屈折する。膨らみの大きい胴部が想定される。口縁端部は浅くくぼみ、角を上方に小さ

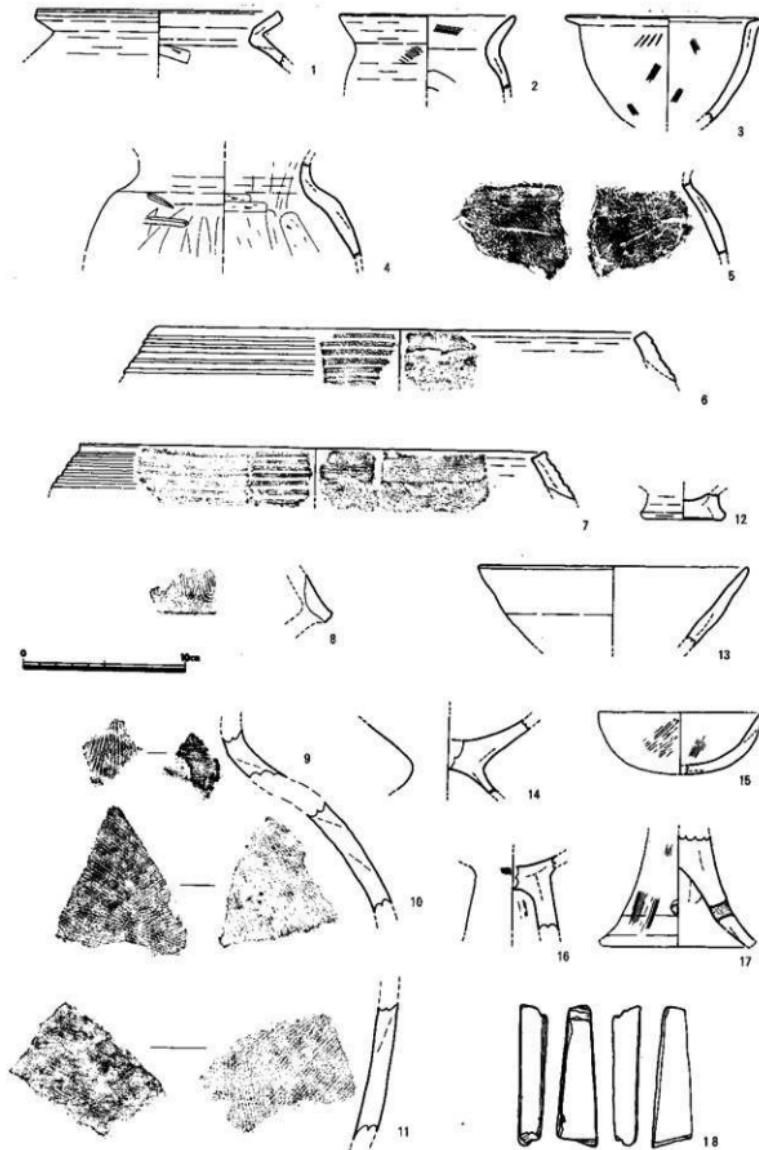


第24図 SI-12住居平面図・断面図

く引き出す。調整は、口縁内外をヨコナデ、頸部の外面がヨコナデ、内面は頸部以下ケズリ。2も小型の単純口縁壺。口縁部は逆「ハ」字状に開き、端部は尖り氣味になる。頸部は「く」字状に屈曲し、胸部はあまり張り出さない。調整は、外面口・頸部ヨコナデ、胸部はハケ後ナデ。内面の調整は風化のため不詳。4、5は甕の上胴部片。4は器壁が厚く、粗雑な作りである。

壺形土器：6～11は大型複合口縁壺である。6、7は内傾する口縁部の外面に多条の平行沈線文を巡らしている。8～11は同一固体の口縁・胴部片である。内傾する口縁部に多条の連続波状文を施している。胸部が大きく張る。調整は、外面の頸部・上胴部が入念なハケ、下胴部にはミガキ痕がみられる。内面はすべてハケ仕上げである。

鉢形土器：3は、口縁部が小さく逆「L」字状に強く屈折する鉢で、胸部は湾曲して小さな底部へとすぼまる。調整は、風化のため詳細不明であるが、内外面ともわずかにハケ痕が認められる。12は鉢の底部かと思われる。



第25図 SI-12出土遺物実測図

高坏：13、14、16、17は高坏。13は坏部片。口縁部・体部が逆「ハ」字状に直線的に開き、口縁端部は丸味をもつ。14は坏部・脚部の片。坏部は逆「ハ」字状、脚部は「ハ」字状に開く。これらの器面調整は風化のため不明。16、17は裾部の開きが小さい脚部片。17は軽近くに円孔2個が穿たれている。16は器面調整は不明。17は外面ハケ、内面は指ナデされている。

坏部：15は坏。体部が内湾して立ち上がり、口縁部は小さく外傾する。口縁端部は尖り気味におさめる。調整は風化のため不明。

《磁石》18は磁石。一端が太い長台形の角柱状を呈する。4面とも研ぎ面として使用されている。

【時期】1の甕、3の鉢、6～12の複合口縁壺、15の坏等が本住居址の時期を決定する資料となる。1の甕は、口縁端部を上方方向に小さく引き出すように仕上げており、これは布留傾向甕に特徴的に認められる。6～12は防長系の複合口縁壺で山本一朗氏が弥生後期末（山本9～10式）とされているものに近い<sup>10</sup>。15の坏は山口県吉永遺跡III－東地区SB3で布留傾向の甕と共に存しておらず、前記の沖丈遺跡SI-13でも同様の共伴状況が確認されている。

以上の検討からして本住居址は弥生時代後期末に位置づけることができよう。

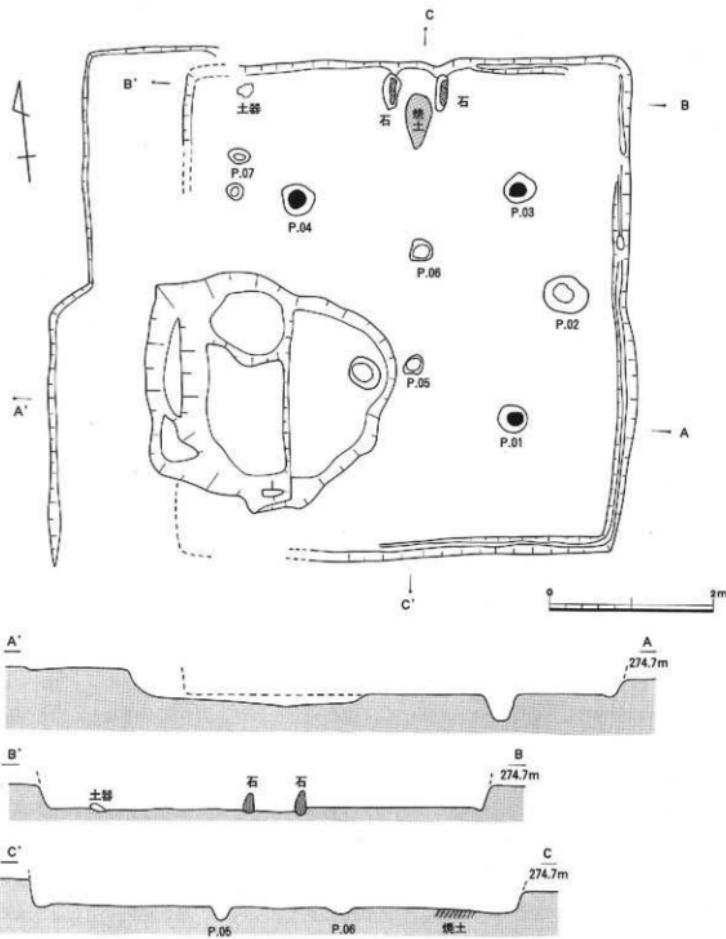
## 2. 古墳時代の遺構と遺物

### ① SI-02住居址（第26図、図版第3-2）

【検出状況】本住居址は北部調査区B区でSI-01a・b住居址の東18mの個所で検出された。北壁・東壁はほぼ完全な状態で検出されたが、南隅付近と西壁は良好な状態では残っていない。北壁の中央には壁に造り付けられた竈が検出された。床面の中央部から南西寄りに大きな土坑状のピットが検出されたが、坑上面には本住居址の張り床が認められたので、先行して掘り込まれたものと判断される。住居址の内外からは多くの土器類や須恵器が集中して出土した他、紡錘車、鉄器等が検出された。

【平面形・規模】方形様の住居址といえる。北東の角、南東の角が明確に検出され、北、東、南の直線的な壁線も明瞭な状態で残っていたので方形をなす住居であることは間違いない。しかし、西側の壁が明確に捉えられなかったので、正方形プランとは断定できない。北壁に造り付けられた竈の位置が壁の中央に位置するとすれば、北壁の全長は5m程度となる。また、P03の中心から東壁元までの距離が1.2mであることを参考にすれば、P04の中心から1.2m前後西側に西壁が存在した可能性が高くなる。そこで想定される東西の距離は約5.1mとなる。南北長は竈付近の北壁元から南壁元までで5.9mを計測できるから、むしろ南北に少し長い平面形であったとするべきであろう。東西長5.1m、南北長5.9mとすれば、床面積は、約30m<sup>2</sup>と計測できる。壁高は検出面より20cm程度。

【施設】住居床面では6個のピットが検出されているが、うち主柱穴と思われるP01（-42cm）、P03（-39cm）、P04（-33cm）の3個で、残りの南西の柱は土坑の埋土中に存在したことが推定される。P01-P03、P03-P04の間隔は2.8mを測り、主柱穴は正方形に



第26図 SI-02住居址平面図・断面図

配置されていることを示す。P05（-18cm）とP06（-13cm）は径が小さく、深さもやや浅めであり、竈を通る南北の軸線上にあることから、屋内を分ける壁のような施設にともなうものと考えられる。

竈は長方形状の扁平な川原石を平行に並べ、これを芯にして粘土でアーチ状の本体を構築したものと思われる。火床の部分は浅くくぼんでいる。北・東・南の各壁元には壁溝が見られた。

#### 【出土遺物】（第27～28図、図版第7-2）

出土遺物は多彩で、須恵器、土師器、縄文土器の他に紡錘車、鉄器、石器、硯片、剥片等がえらわれている。

#### 《須恵器》

蓋坏：1は蓋坏の坏身である。扁平な器形でとくに底部を平坦に仕上げているのが特徴といえる。体部は低く逆「ハ」字状に開き、蓋受けは短く、斜め上方に突出する。立ち上がりは外反気味に内傾する。

高坏：2、3は高坏である。2は坏の下部片。底部から体部へは内湾して立ち上がり、直立している。底部縁にはカキ目がみられる。3は高坏の脚部である。外反して大きく開く。透かしはない。その他の須恵器として大壺の胴部片4～6がある。内外面には叩き目がみられ、6では内面の同心円文がきれいに残っている。

#### 《土師器》

8は甕の下半部。ラグビーボール状の丸味をもち、底部は平底状を呈している。調整は外面がナナメ・ヨコのハケ、内面がハケ後ナデである。9は甕の下部片。漏斗状にすぼまりながら、端部は短く直立している。調整は、内外面共タテ・ナナメハケ、端部はヨコナデする。

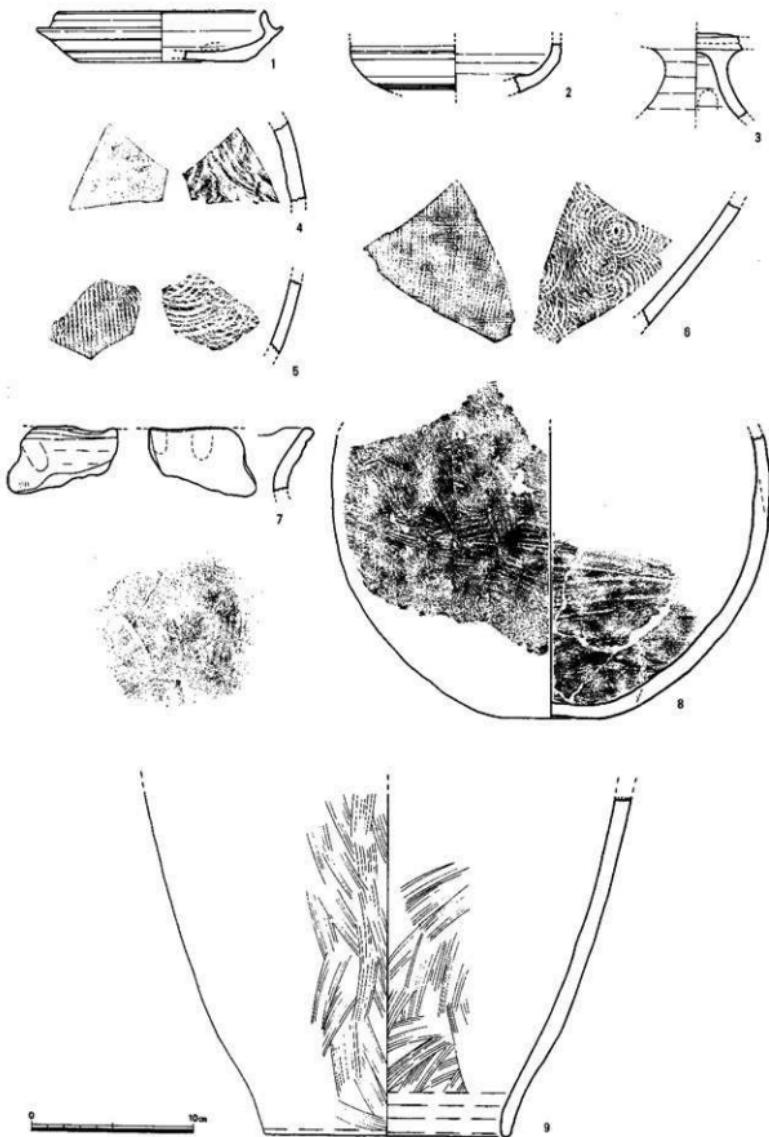
#### 《縄文上器》

7は縄文晚期前半期の浅鉢の口縁部と思われる。外傾する波状口縁で、端部は玉緑状にごく小さく膨らんでいる。内外面共ナデ仕上げ。胎土には砂粒を含んでいる。

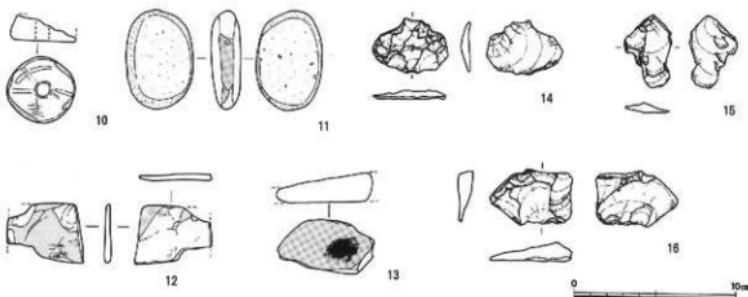
#### 《石器・その他》

10は滑石製の紡錘車。断面は截頭円錐形をなすと思われるが、上半分を消失している。底面には線刻の放射文等が見られる。11は小さな扁平円錐を利用した磨り石。12は磨製の長方形板状石。一角に石剣の関のような割り込みが施されている。用途は不明であるが、磨製石包丁の破片を再利用した石器片かとも思われる。漆黒色を呈している。13は石硯片。隣の一部で磨り面は使用により摩滅傾斜している。14～16は安山岩の剥片である。14は横長の剥片で、一面に調整が施され、他面は剥離面がそのまま残っている。側縁の一部に突起状の膨らみが見られることから「石匙」の可能性も考えられる。15は将棋の駒に似た剥片。断面は片刃をなす。調整は施されていないが、長辺の刃部として使用したかも知れない。16は不定形の剥片。

以上その他、鉄器が3点出土している。鉄族と扁平な鉄器片である。覆土中からの検出で、



第27図 SI-02出土遺物実測図



第28図 SI-02出土遺物実測図

本住居址に伴うとはいえない。

【時期】本住居の時期は、北壁に造り付けられた竈の存在と須恵器の蓋坏等から決定することができる。造り付けの竈は古墳時代後半期に登場する。1の蓋坏、2の高坏等は須恵器山陰編年のⅢ期後半か末期に属するといえる。以上のことと参照すると、古墳時代後期も後半の頃とすることができるよう。

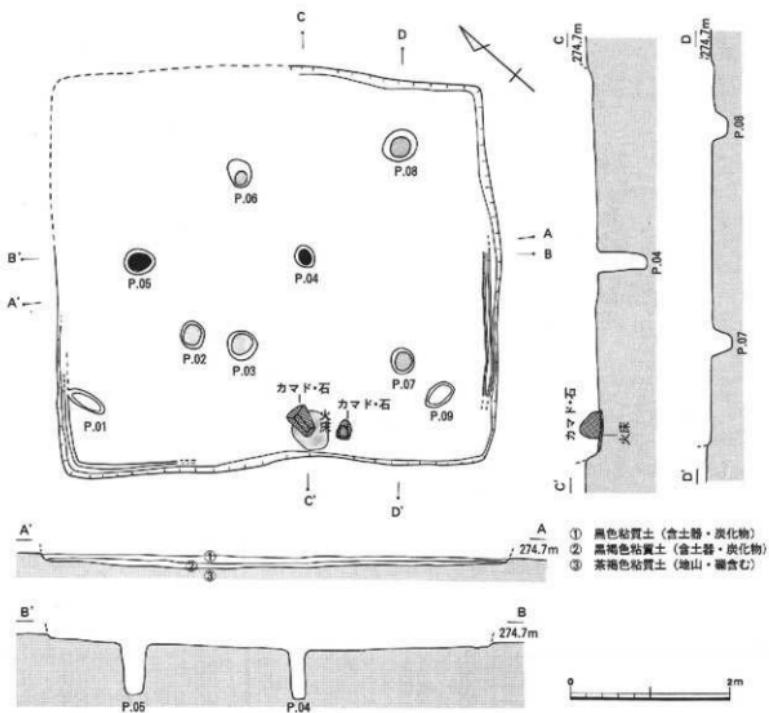
## ② SI-05住居址（第29図、図版第3-3）

【検出状況】北部調査区B区でSI-04住居址の東約10mの個所で検出された。北東、南東、北西の角と東壁、南壁は大体捉えられたが、北西の角と北壁、西壁は、後世の攢乱がひどく、明瞭な状態で検出することはできなかった。南壁のほぼ中央部には竈が造り付けられている。出土遺物には土師器、須恵器片がある。

【平面形・規模】平面が長方形の住居址である。壁元で長辺（南壁）5.4m、短辺（東壁）4.5mを測り、床面積は24.3m<sup>2</sup>と算出できる。竈が長辺の南壁に造られているので、建物の主軸は短辺の南西—北東方向にとらわれていたことになる。また、竈が南壁の中点より少し東寄りに位置することから、住居内の寝所部分が主として西側に置かれたことも考えられる。壁高は検出面から7cm程度であった。

【施設】南壁に造り付けられた竈は、扁平な長方形の川原石2個を横にして並べ立て、これを芯にして粘土でアーチ状の本体を構築したものと思われる。検出時には2個の石が「ハ」字状になっていたが、一個は火床部分から外れていたので、この竈は攢乱を受けていたと思われる。火床部分は赤化して浅くくぼんでいる。

床面で検出されたビットは9個である。主柱穴はP03（-61cm）、P06（-45cm）、P07（-27cm）、P08（-16cm）の4個で、柱間隔は約2.7mである。P04（-31cm）は、竈を通る南西—北東方向の軸線上にあり、屋内を分割する施設に伴うものであろう。P02（-64

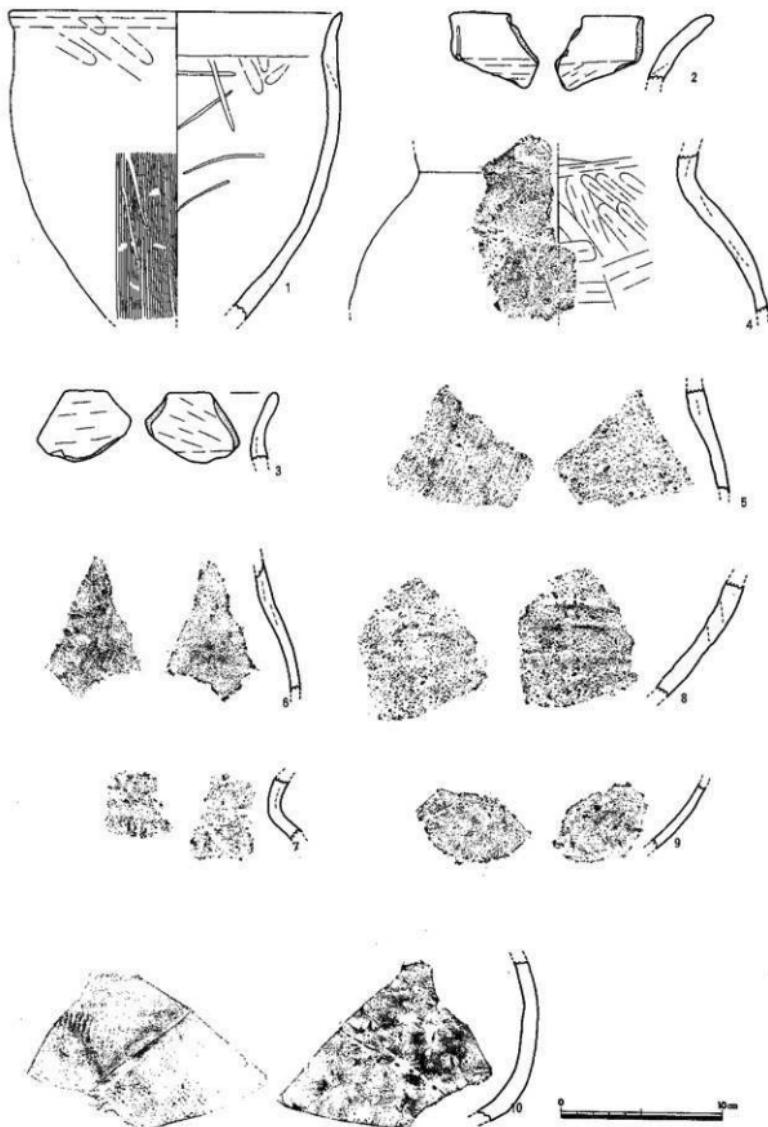


第29図 SI-05住居址平面図・断面図

cm) も形状と深さから主柱穴としてよい。しかし、P03と近接しているので、同時に機能していたとは考えがたい。現状で竈の位置が南壁の中央よりやや東よりになっていることを考慮すると、屋内が西側に拡張されたことも想定できる。すれば、西壁よりのP05（-64cm）が西側に少し広く拡張された寝所のスペースに対応する天井の構造材を支えた柱のものとも考えられてくる。壁溝は東側で一部が見られるが、壁体は全壁を巡っていたと考えられよう。

#### 【出土遺物】（第30図）

土師器の壺、壺と須恵器の平瓶、その他多くの土器片が出土している。これらの中、器形が判明し、かつ時期決定の資料となるものについて図示し、説明を加える。



第30図 SI-05出土遺物実測図

### 《土師器》

甕形土器：1は砲弾形を呈する甕である。口縁部は短くわずかに外傾し、端部は尖り気味になる。胴部は膨らまない。調整は、外面が口・頭部ヨコナデ、胴部ハケ後ミガキ。内面はナデとミガキを施している。外面にはススの付着が認められる。2、3も甕の口縁部。2は逆「ハ」字状に外反し、端部は尖り気味にある。3は少し外傾し、端部は丸味をもつ。

5～7は甕の頭部から胴部にかけての破片。5、6の胴部はあまり張り出さない。5は内外面ともハケ。6は外面ハケ後ナデ、内面ナデ仕上げとなる。7は弓状に屈曲する頸部。外面に連続刺突の列状文が施される。8、9は甕の胴部下半部片。強く湾曲して底部に移行する器形が考えられる。9は器壁が薄く、外面ナデ、内面は入念なハケ調整をしている。

壺形土器：4は直立する頸部で、胴部が球状に大きく膨らんでいる。直口の壺かと思われる。調整は風化のため詳細は不明だが、内面にはナデを施した様子がうかがえる。

### 《須恵器》

平瓶：10は平瓶の胴部片である。扁平な体部にはタテハケした後カキメ状の回転条線を施す。一部には自然釉がかかっている。内面はナデとケズリ痕が見られる。

【時期】造り付けの壺の存在と土師器・須恵器が時期決定の資料となる。とくに10のような平瓶は古墳時代後期でも新しい時期に登場している。古墳時代後期後半、山陰須恵器の編年でⅢ期の後半頃が本住居の營造期と考えられる。

### ③ SI-07住居址（第31図、図版第3-4）

【検出状況】南部調査区C区西端、SI-08住居址の西約5mの個所で検出された。当初、円形した黒褐色土の落ち込みを確認して掘り下がったが、結果的には方形を呈する住居址を検出することになった。掘り込みが浅く、とくに南西の隅付近は遺存状況が悪いため、壁線は検出しえていない。

【平面形・規模】東壁と北壁の状態から方形様プランの住居址と思われるが、規模は、壁元で測定すると、東西約3.4m、南北4.1mで厳密には南北に長辺をもつ長方形の住居址といえる。床面積は13.9m<sup>2</sup>と算出される。

【施設】床面からは8個のピットが検出されている。中央のP05（-14cm）と南西隅付近のP06（-18cm）、P07（-17cm）が位置と深さから本住居址に伴う柱穴の可能性があるが、後2者は穴径が大きく、底が皿状をなしているため、柱穴とは断定はできない。住居址の規模からすれば、床面に柱を立てず、壁外に垂木の葺き降ろしを受ける柱と横木があれば、十分上屋を支えうるから、そうしたケースを想定してもよいであろう。

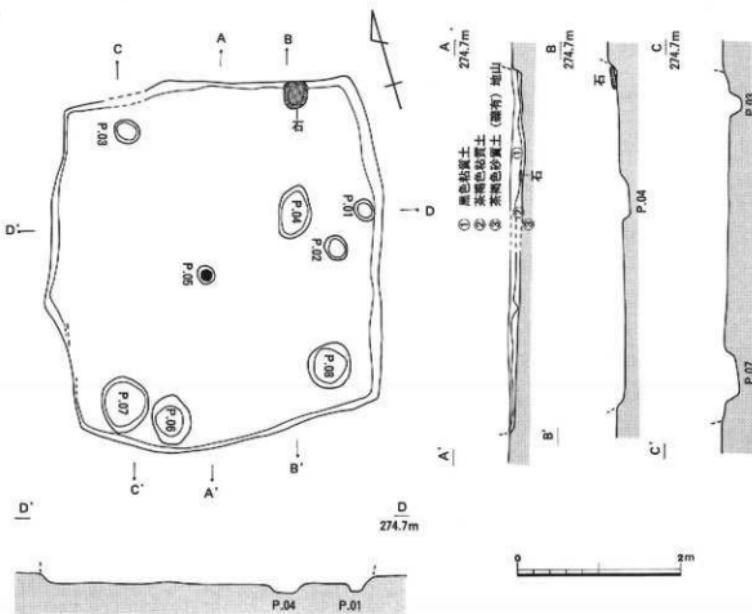
壁高は最高で検出面から6cm程度であった。

### 【出土遺物】（第32図、図版第8-1）

多くの土器片が検出されているが、器形をうかがうことができたのは以下の2点である。いずれも土師器である。その他に磨り石が出土している。

### 《土師器》

1は壺である。底部はわずかにくぼむ。体部は直線的に逆「ハ」字状に開き、口縁端部



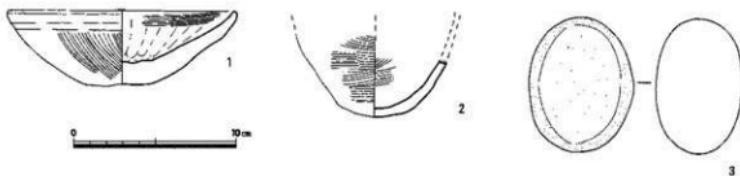
第31図 SI-07住居址平面図・断面図

下でわずかに内湾し、端部は丸味をもつ。外面は口縁部ナデ、体部ハケ、内面は口縁部ヨコナデ、体部はハケ後ナデ調整となっている。2は深みのある体部の椀形の土器。手捏であるが、器壁は薄く作られている。調整は内外ともハケ仕上げである。

#### 《石器》

3は小型の扁平な円盤を利用した磨り石である。

【時期】1、2の土器が本住居址の時期を決定する資料である。また、住居址のプランが方形様であることも考慮すべきであろう。1の壺は弥生後期終末期に見られるものと思われる。方形系統の住居址は前立山遺跡ではそのIV期には出現している。他にも先記した沖丈遺跡SI-13住居址のような例がある<sup>46</sup>。これらを参考にすると弥生時代終末期から古墳時代初期にかかる住居址としても大過ないかと考える。



第32図 SI-07出土遺物実測図

### 3. その他の遺構と遺物

本遺跡では、住居址の他に大型のビットや柱穴状の小ビットがいくつか検出されている。これらは、SK-01以外土器の出土がなく、その所属時期を明確にすることが困難なものである。ここでは、これらのビットを一括して取り上げ、説明を加えることにする。

#### ① SK-01 (第33図、図版第3-5)

【検出状況】北部調査区A区、SI-02の東約3mの個所で検出された。

【平面形・規模】不整形円形で径は約 $3.2 \times 2.8$ mと測定される。穴の側壁は整然とした状態を示さず、いくつかの段状をなしている。底は平坦で、深さは40cmを測る。

【出土遺物】台付甕の台部が出土している。体部との接合部は弓状に湾曲し台部は短く、大きく「ハ」字状に開いている。端部は平らに仕上げられる。調整は、外面ハケ、端部ヨコナデ、内面はハケ仕上げである。

【時期】台付甕が時期決定の資料である。胴長の甕で台が付く例は、先記清水遺跡第2環壕出土土器群にあり、前立山遺跡SI17覆土からは台が出土している。これらから推定すると、本土坑の時期は、およそ弥生後期後葉とすることができよう。

#### ② SK-02 (第33図、図版第3-5・6)

【検出状況】北部調査区B区、SK-01の北東4mの個所で検出。坑縁近くの埋土上面に楕円状の疊が横たわっていた。また、坑縁の北東隅には小坑（径20cm、-25cm）が穿たれている。杭状のものが立てられていたのであろうか。

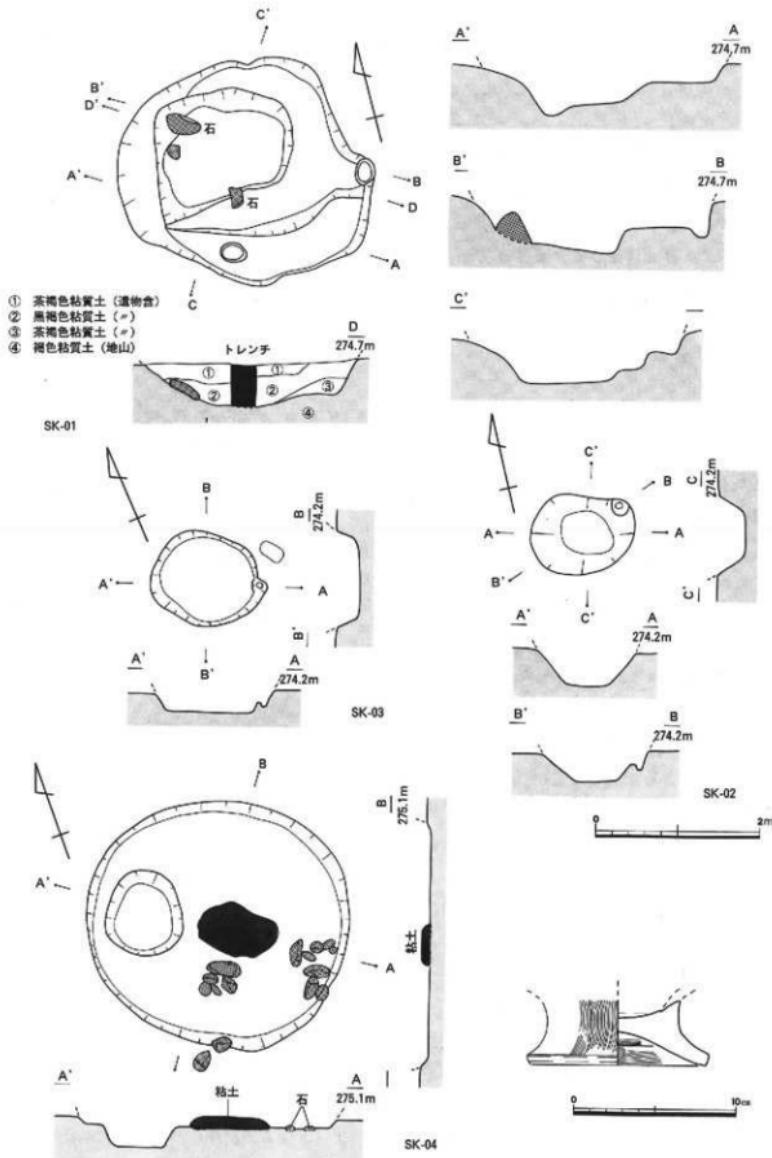
【平面形・規模】北西—南東に長軸をとる楕円状の平面形を呈している。坑径 $1.35 \times 1.1$ m、深さは、検出面から21cmを測る。側壁は底部に向かって窄まり、底面は船底状をなしている。

【出土遺物】なし。

【時期・性格】時期は不明。埋土上面の疊を標識とみれば、墓坑の可能性がある。

#### ③ SK-03 (第33図、図版第3-5・7)

【検出状況】北部調査区B区、SK-01の北東4m、SK-02に近接した場所で検出。検出面はSK-01と同じ。埋土上面（検出面と同じ）では坑縁近くに横長の各疊が1個検出されている。また、北東のすみに当たる個所で小坑（径20cm、-10cm）が検出された。



第33図 SK-01、SK-02、SK-03、SK-04平面図・断面図  
SK-01出土遺物実測図

【平面形・規模】東西に長軸をとる不整橢円形を呈する。坑径 $1.24 \times 1.0$ m、深さは、検出面から33cmを測る。底はほぼ平坦になっている。

【出土遺物】なし。

【時期・性格】時期は不明。SK-02と同様な性格が想定される。

④ SK-04（第33図、図版第3-8）

【検出状況】南部調査区C区、SI-08住居址の真南14mの個所で検出。円形を呈する。底面中央で、底面に接して灰褐色の大きな粘土塊（ $1.1 \times 0.6$ m、厚さ約10cm）が残っていた。また、粘土塊付近から東壁の間には大小の川原石が多数、並べられたような状態で検出された。さらに西壁寄りには皿状のピットが存在している。

【平面形・規模】円形の堅穴遺構といえる。径3.2m、面積は4.9m<sup>2</sup>と算出される。壁の高さは検出面から7cm程度。

【施設】西側に不整橢円状の浅い皿状のピット（ $1.1 \times 0.9$ m、-28cm）がある。東壁寄りには礫群が存在するが、本土坑に伴うものかは判然としないが、底面に接し、平坦に、あたかも並べられたようになっている。

【出土遺物】粘土塊のみ。

【時期・性格】時期を決める資料がなく、よって不明である。性格については、穴の大きさと粘土塊等が検出されたことから、何らかの貯蔵施設ではないかと推測される。

⑤ ピット群

SI-08住居址とSK-04の中間に、サークル状に分布するピット群がある。外周で約5.5mを測り、ピットも同工同大である。調査の過程では、明確な壁や床面を検出していないが、ここに円形の住居址が存在したことをうかがわせる事実である。

#### 4. 遺構外から出土した遺物（第34～35図、図版第8-2）

住居址等の遺構検出作業の中で、南・北部の調査区から多くの土器等が出土している。次に、これらの中、形状の判明したものを図示して説明を加える。

《弥生土器》

壺形土器：10は長胴の壺である。単純口縁で口縁部は、やや外反気味に逆「ハ」字状に開いている。端部は斜め平坦に仕上げる。基部は「く」字状に屈曲し、肩部は小さく膨らむ。調整は外面ハケ、内面もハケ。但し、内面はケズリ後にハケを施している。B区出土。

壺形土器：12は複合口縁の壺の口・頸部。口縁は内傾し、複合部は鈞状に大きく突出している。頸部は筒状を呈する。口縁部には多条の連続波状文が施される。調整は、外面頸部ハケ、内面もハケ仕上げしている。SI-10住居址覆土出土。

坏：13は碗状の深い坏とする。底部は丸味をもち体部は湾曲して立ち上がりながら中位から上方に直線的にのびて口縁部に至る。内外にハケ目が残る。14は小型丸底壺状の坏である。底部は凸レンズ状に膨らみ、体部との境には稜が見られる。体部～口縁には外反して移行し、口縁端部は尖り気味におさめる。口縁・体部はハケ、底部付近はナデ仕上げさ

れている。内面底には指頭痕が見られる。(D区出土)。15は手捏ね製で、やや浅めの坏。底部は小さい丸底状で体部は逆「ハ」字状に内湾気味に大きく開く。口縁は少し垂み、正円形をなさない。内外面にハケ目が残る。(D区出土)。高坏：16、17は高坏の脚。16は筒状で、脚裾が大きく「ハ」字状に開いている。端部は丸味をもつ。内外面ともハケ仕上げ。(E区出土)。17は小さく「ハ」字状に開く。中位に小孔がある。(D区出土)。

以上の弥生土器は、いずれも後期後葉から終末期のものと思われる。

#### 《須恵器》

1は小型甕の口縁部片。口縁端部の下端が斜め下方に引き出される。11は須恵器の蓋坏の蓋片。やや扁平な天井部から強く屈曲して下方に折れ、口縁部に至る。口縁端部は丸味をもつ。天井部にケズリ痕があり、体部との境には浅い沈線状のくぼみが見られる。山陰編年のⅢ期でも後半のものと考えられる。4は甕の胴部下半部片。外面ハケ、内面は短い平行叩き目が見られる。

#### 《陶磁器》

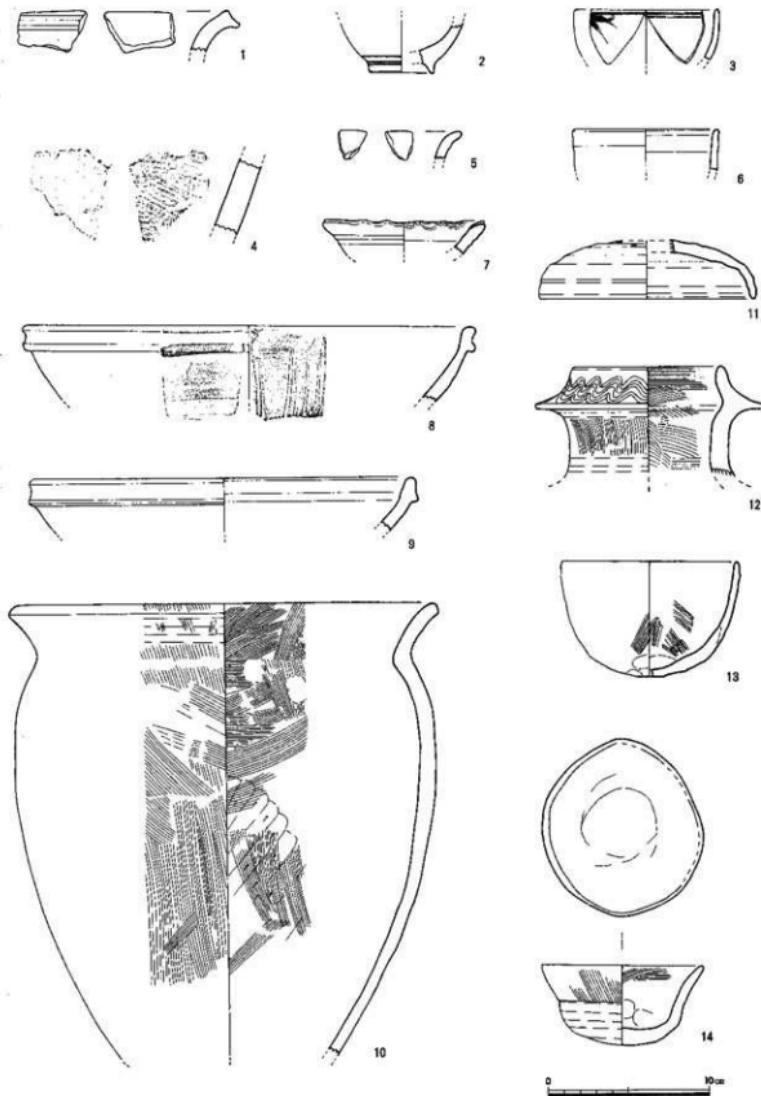
2、3、5～9は中・近世陶磁器片。2は伊万里系の染付け碗。3も伊万里系碗であるが、近代に降る可能性もある。5、6は近世陶器。7は瀬戸美濃系の皿。8、9は擂鉢で、9は鉄釉がかかる。近世のもので産地は不明。

#### 《土師質土器》

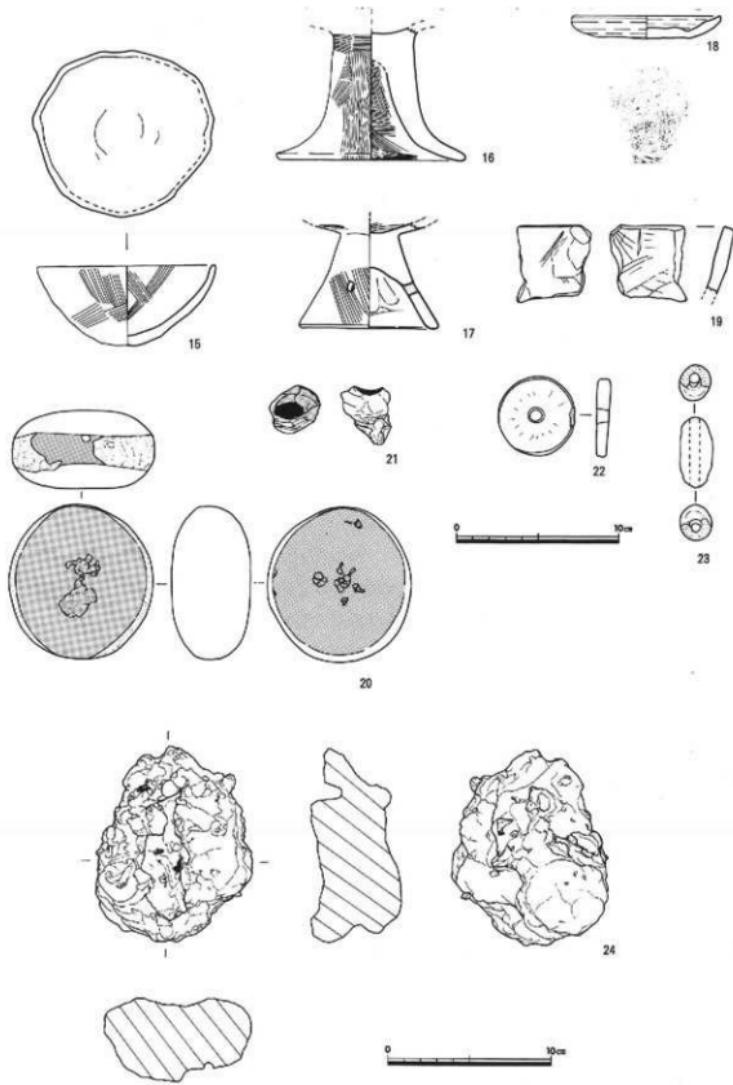
18は土師質土器の皿。底径が大きく、体部は低い。内外とも回転ナデで、糸切り底である。中世土器。

#### 《その他の遺物》

19は滑石製石鍋の口縁部片である。20はやや厚めの円礫を用いた磨り石。21は吹子の羽口片。口径は小さい。22は扁平な円盤状の紡錘車。23は紡錘形の土鍤。24は椀形の鍛冶滓。



第34図 その他出土遺物実測図



第35図 その他出土遺物実測図

## V 考 察

### 1. 造構について

#### ① 弥生時代住居址の形状・施設と時期

円形住居として、SI-01・b、SI-08、SI-09、SI-11、SI-12の5棟がある。規模は、SI-08が径7.1m、SI-01・bとSI-09が径6m代、SI-11とSI-12が径4m代である。住居構造としては、SI-01・bが主柱穴5個所を円形に配し、床中央に大型のピットを掘り込んでいる。壁溝が巡る。SI-11とSI-12は中央ピットを挟んで2本の主柱穴が配置されている。SI-08はベッド状造構を伴う。

円形か隅円方形の住居址として、SI-01・a、SI-10がある。SI-10は長径8m(8.0×6.0m)で、沖場遺跡最大の弥生住居址である。SI-01・aは5m代。この2棟の住居址は主柱穴が4個所で、床中央に大型のピットをもつ。

胴張隅円方形の住居址として、SI-04、SI-06がある。SI-04は長径3m代、SI-06は4m代で、比較的小型の住居址である。主柱穴は2～3個所でSI-04は中央ピットを欠いている。

円形・円形か隅円方形・胴張隅円方形とも弥生後期終末まで存在する。住居の形状に新古の違いは認め難いが、強いて言えば、不整円形住居のSI-01・aが後期後葉に属し、9棟の住居址では時期がやや遡る。

方形の住居址SI-07は弥生後期末から古墳時代初頭としたが、内部の構造は不明な点が多い。ただ、方形住居址そのものは弥生後期後葉にも例はある。伴う土器が弥生後期末に収まるのであれば、この住居址も弥生時代の範囲に留めるのが妥当かと思われる。

以上を概括すると、円形系統の住居址には規模の点で8mクラス、6～7mクラス、4～5mクラスの3ランクがあり、それぞれに5個所、4個所、2個所の主柱穴が伴う。SI-09のように、主柱穴は存在しないが、壁際にはサークル状に柱穴を配した住居址が営まれた可能性をもつ住居址もある。胴張隅円方形の住居址は小型で、主柱穴は2個所である。すべての住居址には中央ピットが存在する。

#### ② 弥生時代の集落について

SI-01・a住居址には、同心円状の拡大が見られ、さらにSI-01・b住居址によって破壊されている。SI-04住居址はSI-06住居址によって壁の一部が破壊されていた。また、SI-10～SI-12の3棟の住居址は互いに近接しており、3者が同時に存在したとは考えられない。

時期別に住居址の分布を見ると、後期後葉のSI-01住居址が北西の端に位置し、後期末のSI-10～SI-12住居址が南東部に営まれている。この事実から考えると、後期後葉期にはSI-01・a、SI-01・b住居址を南東縁辺とする集落が河内川に近い緩斜面にあったのかも知れない。後期末になると、SI-04、SI-06がより東に、SI-08～SI-09住居址が南側に、SI-10～SI-12の各住居址が南東側に造営されていたと推定される。つまり、後期末に集落の中心が南東部に移動してここに新しい集落が営まれたと解釈できる。その際、後期末の短い間にも廃絶される住居と新設される住居があったことは認めねばならない。

何棟の住居で集落がつくられていたのかについては、北部と南部の調査区の間に未調査の区域が残り、西方と北側も十分な調査が行き届いていないので、明確なことはいえない。しかし、弥生時代に数棟の住居址がまとまって一個の集落を構成していたことは、これまでの各地の調査で知られているから、そういうことを参考にすると、SI-07、SI-08、SI-10、SI-12もしくはSI-11、SI-04・SI-06の各住居址がまとまって集落をなしていたことは推定できる。5～6棟でまとまる一単位の集落の存在が考えられよう。

この集落ではSI-08住居址が最大で、中心的存在であり、これに大クラスで径7mのSI-07、中クラスで径5m若のSI-06、SI-11、さらに小クラスで径3～4mのSI-04、SI-12といった住居址が一群をなしていたと思われる。長方形住居址のSI-07は、これらの住居とは別の役割をもっていた可能性があり、南部の土坑SK-04もこの住居群に伴う貯蔵施設か作業場であったと推定してもよい。必要にして十分な調査ができなかった関係もあって、多くのことを考察することは、慎まなくてはならないが、沖場遺跡において、弥生後期後葉から末期にかけて、一単位の集落が、短期間に継続して営まれていたことは確かなことといえる。

### ③ 古墳時代住居址の形状・施設・時期

古墳時代の住居址はSI-02とSI-05の2棟である。いずれも、長方形プランであるが、長軸の置き方が異なっている。すなわち、SI-02は長辺側に主軸があり、SI-05は短辺側に主軸を採っている。これは、竈の取り付け方から判明することである。

両住居址は、扁平な川原石を芯にした粘土造りの竈を壁に取り付けているが、SI-02は短辺の北壁の中央に設け、SI-05は長辺の南壁に造り付けている。2棟とも主柱穴は3個所検出されたが、本来は4本柱の建物であったと推定される。規模は、SI-02が約6×5m、SI-05が約4×3.5mで、この時代の住居址としては中～小型の住居址といえる。

SI-02、SI-05では、時期決定の資料として山陰編年Ⅲ期後半の須恵器が出土しているので、古墳時代後期、およそ6世紀末から7世紀の初め頃の住居址としてよい。

### ④ 古墳時代集落について

2棟の住居址は北部調査区にあり、ほぼ東西線上に並んではいる。しかし、両住居址は軸の置き方、竈の設置場所が違っている。果たして、同一単位の集落に属していたのか判断は難しい。また、2棟だけで一集落をなしていたとも思えない。その点では、SI-06住居址と重複して、古墳時代後期の住居が営まれたことを推定したことが思い出されるが、それでも3棟程度の住居である。調査区の外に、さらにいくつかの住居址が存在するのであろうか。

いずれにしても、古墳時代後期集落の実態に関しては、これ以上のことは考案できない。

## 2. 遺物について

### ① 弥生土器

弥生土器の器種では甕の出土量が非常に多い。図示できたものの50%は甕であり、破片の多くも甕と推定されるものが目立っている。さらに甕でも口縁部が短く逆「ハ」字状に

開き、頸部が「く」字状に屈曲ないし屈折し、胴部が長いものの存在が大勢をしめる。

しばしば触れたように、この種の壺は瀬戸内西部の周防地方に濃密に分布しており、地域色をなしている。沖場遺跡においても後期弥生土器の主体をなすのは、こうした西部瀬戸内系の土器群とことができよう。これら長胴の壺に伴って山陰系の複合口縁の壺や布留傾向の壺を模倣したと思われる在地系の壺が少量出土している。

壺に次いで出土数が多いのは壺、鉢、坏である。壺には2形態があり、その一は複合口縁の壺で、複合部が水平方向に厚く突出する特徴をもっている。これらは「防長系複合口縁壺」と称され、やはり分布の中心は瀬戸内西部にある。その二は壺玉状の胴部に短い直口口縁が付くタイプである。これも、清水遺跡等で顕著に見られるように、西部瀬戸内の土器群を構成する壺といえる。

鉢にも2タイプがある。短く、逆「ハ」字状に開く口縁で端部を平坦にし、上胴部に連續刺突文を巡らすもの（第14図5）は安芸方面に多く分布し、前立山遺跡からもいくつか出土している。もう一つのタイプは深鉢状の小型鉢（第21図4）である。外面をハケ仕上げにしている。類品は乏しいが、やや大型のものが清水遺跡で、底部が平坦で、口縁端部が尖り氣味のものは山口県船頭遺跡等に見られる。

坏は、皿型（第25図15、第34図1）と椀型（第34図13）のものがある。椀型は前立山SI23、清水遺跡第2環壕、山口県柳瀬遺跡D地区LS001出土土器群中に類例があり、皿型は山口県吉永遺跡SB3出土土器群に類品が見られる。

高坏も数例出土している。脚に小さい円孔を穿ったもの（第23図4、第25図17）は、時期を示す資料として注目される。

以上の弥生土器は、総じて弥生後期後葉から終末期に属すると考えられる。前立山遺跡の編年には従えば、ほとんどが、そのIV期に相当し、一部III期に遡るものがあるとしてよい。このことは、山本一朗氏が提示された山口県東部（周防）の弥生後期土器編年や石井龍彦氏の編年観に照らして確認できることである。あるいは、山陰系の複合口縁壺の時期とも矛盾しないといえる。例えば、SI-06、SI-08出土の山陰系の壺（第15図12、第17図10）は、「大木式」の特徴を備えている。

### ② 須恵器

蓋坏・坏・平瓶等が出土している。これらは、先に触れたように須恵器に関する山陰編年III期でも後半のものとすることができます。

### ③ その他

弥生時代の住居址からは磨り石が少なからず出土している。また、同様に鐵器と砥石が出土したことなども沖場遺跡の性格を考える上で注意すべきことであろう。

以上の他にも注意される遺物が見られる。石製紡錘車は古墳時代後期のものと思われる。中・近世の遺物として輸入陶磁器、とくにSI-08の覆土から出土した白磁碗等は注目される。あるいは、滑石製石鍋も地域性を考えるうえで参考になろう。1979（昭和54）年に調査された河内遺跡は、沖場遺跡の南西、前立山遺跡の北側にあり、包含層の中から中国製

陶磁器を初めとして須恵器、土師器等が出土している。古代から続く、中世の有力な遺跡の一つと考えられる。前立山・沖場遺跡の一帯は、弥生・古墳・古代・中世の各時代を通じて繁栄していたことが推定される。

なお、吹子の羽口や碗形甌は時期を特定できないのが残念であるが、中世期の遺物である可能性は高い。これらも遺跡の性格と関わる遺物といえる。

### 3. 前立山遺跡との関連

沖場遺跡が前立山遺跡と地域的に深い繋がりがあることは、度々指摘したところである。今回の調査で検出された遺構と遺物の検討を通して、今一度この問題を考えておきたい。周知のように、前立山遺跡は1978（昭和53）～79年にかけて発掘が行われ、多数の弥生後期の住居址、弥生中期の墳墓、古代の大型掘立柱建物跡等が検出されている。住居址群は東西の尾根上から北斜面にかけて分布し、総数で23棟が確認されている。これらは互いに重複し合うものがあり、また出土土器にも時期差が認められることから、ある期間内に継続して営まれたものであることが知れる。また、弥生中期中頃と見られる墳墓は、小さい谷を隔てた南側の尾根上にあり、その斜面でも1棟の弥生後期住居址が発見されている。これを見ると、前立山では弥生後期に北側の尾根の最も高位に営まれた一群、そこからやや東に下った尾根上に広がる一群、南丘陵の一群と計3群の集落が、少なくとも存在していたと推定できる。

これら3群が営まれた時期を、沖場遺跡出土土器の検討に立って対比すると、ほとんどが前立山IV期に属し、一部がIII期に通る傾向を指摘できる。つまり、前立山遺跡では、後期後葉の頃に集落の形成が始まり、後期後葉から末期にかけて多数の住居が営まれ、集落としての最盛期が出現したと考えられる。

以上のような、集落動向は沖場遺跡と共に通している。前立山遺跡と沖場遺跡が地形的に河内川を挟んで対峙的な位置に営まれていることからすれば、高津川の本流を望む二つの山丘の尾根から裾部の扇状地にかけて弥生後期後葉から末期に共存して集落が展開していたということになろう。この際、後期後葉以後に急速に拡大した集落の出自が問題となる。すでに中期中頃には大型の墳墓を成立させた人々の集落が、前立山の近辺に存在したことは容易に想像できるが、実態の解明は今後の課題である。そのことを一応棚上げにして考へるにしても、短期間に急速に規模を拡大した前立山・沖場集落の出現と廃絶の背景として、やはり弥生後期後葉から末期にかけての西日本全体の政治的・社会的状況を考慮しなければならないようと思われる。このことを考へるに当たっては、中国山地の交通の要衝を占める当地の地理的条件を無視することはできないであろう。今後は、名称として前立山と沖場遺跡を近接する一群の地域共同体として考案を加えていく必要がある。そして、弥生時代の問題に止まらず、以後の時代、とくに、鹿足郡衙の所在問題等の解明も含めて地域の考古学的研究を推進することが求められるであろう。

## VI 補論 沖場遺跡の鉄器について

### 1. 鉄 器

沖場遺跡からは鉄器が少なからず出土しているが、そのうち12点を図化した。このほか当遺跡からは楕円形滓も出土している。これらの鉄器は出土状況や帰属年代に差異があるが、ここでは一括して、武器、工具、その他の鉄器類の順で報告する。

#### ① 武器（第36図1・2、図版第8-2）

武器は鉄鎌が2点出土している。1はSI-02から出土した無茎三角形鉄鎌で、長さ3.2cm、幅3.2cmを測る。平面形は五角形状を呈し、抉り部は台形状をなしており、鑿切り技法によって成形されたものであることは明白である。無茎三角形鉄鎌については、山陰地方では平面形が五角形を呈するタイプは弥生時代後期後半から終末期にかけて盛行することが明らかにされている。SI-02は古墳時代の住居址だが、覆土中からは弥生終末期の土器が出土しており、その特徴からみて当該期の所産である可能性が高い。

2は柳葉式鉄鎌と考えたが、先端部が欠損していること、茎が幅広である点から、ヤリガンナ等の工具の未完成品である可能性もある。現存長5.9cm、刃部幅1.4cmを測る。関は明確でなく、鎌身部は断面矩形の棒状の素材を上下両面から鍛延することにより作り出している。SI-09（弥生時代終末期）からの出土。

#### ② 工具（第36図3～5・7、図版第8-2）

##### 《ヤリガンナ》

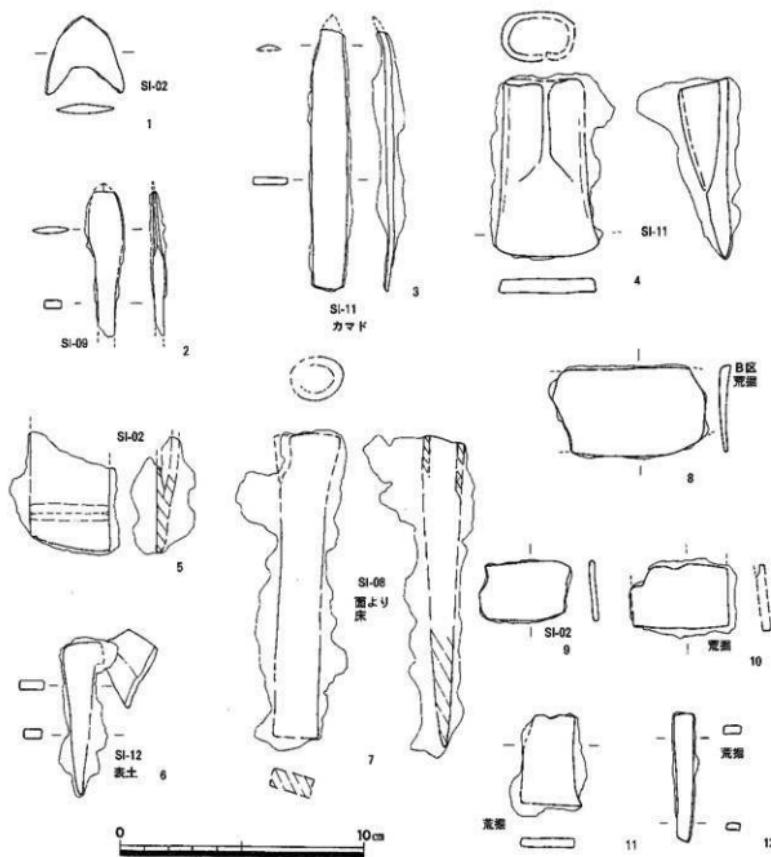
ヤリガンナは1点出土している。3は弥生時代終末期のSI-11出土のヤリガンナで、先端部を欠損しているが、現存長10.6cm、幅1.5cmを測る。刃部と身部との幅はほぼ同じで、関は明確でなく、村上恭通氏分類のIV b型に属する。刃部はやや反るが裏書きは明瞭でなく、断面三角形状を呈する。このタイプは山陰地方の弥生時代終末期のヤリガンナとしては通有のタイプのものである。

##### 《斧》

鉄斧はその可能性のあるものを含めて2点出土している。4は弥生時代終末期のSI-11から出土した袋状鉄斧である。長さ7.3cm、刃部最大幅4.3cmを測る。平面形はほぼ長方形を呈し、刃部はやや撥状に広がる。袋部は楕円形だが部分的に稜をなしている。袋部の突き合わせは比較的しっかり作られているが、閉じ合わせは密着しない。刃部の縦断面形は比較的厚みのある作りで、袋部の間に段を形成する。このことから比較的厚手の素材を用いて上半部を左右に鍛延したのち、折り返して袋部を形成したものと想定される。こうした比較的のよい袋状鉄斧は当該期の山陰地方では少ないが、邑智町沖丈遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡に類例がある。

5は破損、鏽化が著しいが、板状鉄斧の刃部の可能性のある資料である。実測図の下辺部は肉眼観察では刃部があるように見受けられ、偏刃状を呈する。比較的厚手の鉄板であるが2枚に大きく剥離しており、正確な厚さは不明。SI-02出土。

島根県教育委員会 池淵 俊一



第36図 出土鉄器実測図 S=1/2

③ その他の製品（第36図 6）

7は鋳化が著しいが、SI-08から出土した比較的大型の鉄器で、袋状盤の可能性のある資料である。

全長12.6cm、幅1.8cmを測り、刃部は比較的厚手の作りで現状では3枚に剥離しており、合わせ鍛え製品である可能性がある。肉眼観察では断面円形の袋部が形成されているよう

に見受けられるが、X線写真では袋部のラインや閉じ合わせ部が判然とせず、器種の特定については留保しておきたい。SI-08は弥生時代終末期の住居址であり、当該期の袋状鑃は県内では出土例がないが、鳥取県では青谷上寺地遺跡から、また隣接する山口県域では井上山遺跡、下七見遺跡等から出土している。

6は鉄釘と考えられる資料で、全長6.2cmを測る。頭部の形状は鋒が著しく不明。頭部付近に須恵器蓋の破片が付着しており、古墳時代後期に属するものであろう。SI-12の表土巾から出土。

#### ④ 不定形鉄器（第36図8～12）

8～12は不定型な板状又は棒状の鉄器である。9がSI-02から出土である他は、いずれも表土掘削中の出土品である。8は比較的大型の板状鉄板でやや反りが認められ、実測図下辺は刃部があるようにも見受けられるが定かでない。これらの鉄器は何らかの製品の破片である可能性もあるが現状では明らかにし得ない。むしろ鍛冶に供する鉄素材である可能性も考慮される。特に12のような棒状鉄片は2のような有茎鑃もしくはヤリガンナを製作する際の素材であった可能性がある。

#### ⑤ 小結

沖場遺跡出土の鉄器は年代を特定することの困難な資料も含まれるが、その特徴から見ておむね弥生時代終末期のものと考えて大過ないと思われる。その特徴をみると、1のような無茎三角形式鉄鑃や3のようなIVb式ヤリガンナなど、基本的には出雲部と共通する特徴を備えているといえる。

ただし、やや細かく見ていくと、山陰地方の鉄鑃は無茎三角形式が主流を占めるが、抉り部は三角形または緩やかな弧をなす例がほとんどであり、当遺跡出土の無茎三角形式鉄鑃のような抉り部が台形状を呈している例は管見の限り存在しない。同タイプの無茎三角形式鉄鑃は淨案寺遺跡例などの広島湾岸や北部九州に類例が認められ、こうした方面からの影響も考慮される。また、当遺跡に隣接する前立山遺跡では身部に裏すきをもつ北部九州・西部瀬戸内的なヤリガンナが出土しており、また7のような袋状鑃の可能性のある鉄器など、当遺跡の出土の鉄器には北部九州・西部瀬戸内的な要素も色濃く認められる。こうした陰陽の要素が錯綜する様相は当遺跡の土器様相と一致するものであり、山陰・山陽の結節点としての位置を占める当遺跡の性格を雄弁に物語るものといえよう。

## VII 結 語

沖場遺跡は、高津川本流に沿う六日市町内では比較的広い沖積平野に面した弥生後期後半期の集落遺跡である。調査した範囲からは一単位の後期集落が、短い期間、継続的に営まれたことが判明した。この集落は、前立山集落と親密に連携しながら、高津川と河内川によって形成された沖積低地で水田稻作を行い、また、少なからず背後の山野の食料資源を利用しながら農耕生活を展開していたものと思われる。

注意されることは、沖場・前立山集落が後期後半にほとんど突如として出現し、古墳時代初期を待たずに終焉したという事実である。また、両集落からは少数ながら鉄器の出土が確認されたが、このことも集落の消長と合わせて、当該期における本州西端部の社会状況の中で考察されるべきことと考えられる。その際、六日市町が中国山地の交通要衝地であることも充分考慮する必要があろう。防長系土器、山陰系土器、安芸方面の土器と近隣地域の土器が多數混在した事実に注目しなければならない。

前立山遺跡では古代の大型掘立柱建物が検出され、これを受けて、調査者は当地に鹿足郡郡衙の所在を想定された。沖場遺跡でこのことを積極的に裏付ける事実を見出すことはできなかったが、古代末中世初の輸入陶磁器の出土等はその片鱗と理解することもできる。

およそ10ヶ月に及ぶ発掘調査からは、多くの事実を確認することができた。しかし、上記したこと以外にも重要なことが看過されたおそれは、残念ながらあるし、そのことは率直に認めねばならない。なによりも、遺構の検出が困難を極め、より性格に事実を把握することができなかったことを反省点としてあげなければならない。

いずれにしても、沖場遺跡の発掘は、六日市町教育委員会が初めて取り組んだ本格的文化財調査であった。今後、この経験を生かして町内文化財の調査と保護をさらに進めていきたい。

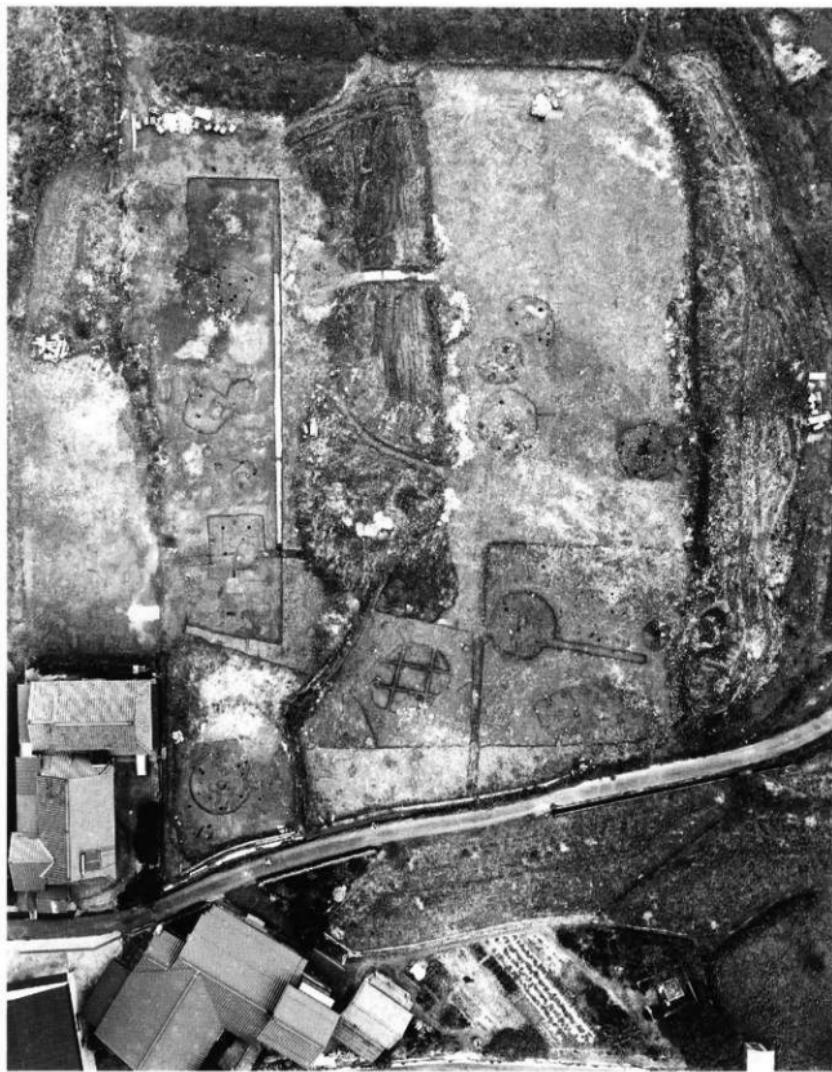
報告を終えるに当たり、調査に御指導・御協力頂いた各位に深甚の感謝を申し上げる次第である。

註

- i 松本岩雄「石見地方」「弥生土器の様式と編年」木耳社、1992年。
- ii 山本一朗「山口県東部（周防）弥生後期土器編年」「周防古王国の研究」、1995年。  
石井龍彦「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器について」『陶硯』13、  
2000年。
- iii 安芸地域」「弥生土器の様式と編年」木耳社、1992年。
- iv 広島県埋蔵文化財調査センター編『千代田流通団地造成事業に係わる埋蔵文化財発掘  
調査報告書』II、1998年。
- v 註 i と同じ。
- vi 註 i と同じ。
- vii 冲丈遺跡については、調査を担当された牧田公平氏から教示をえた。報告書は近刊。
- viii 次山淳「初期布留式土器群の西方展開—中四国地方の事例から」『古代』103、1997年。
- ix 註 ii、山本論文と同じ。
- x 山口県教育委員会他編『清水遺跡』（『山口県埋蔵文化財調査報告書・第118集』）、198  
9年。
- xi 註 ii、山本論文と同じ。
- xii 前立山遺跡SI11が方形住居址。冲丈遺跡SI-13については牧田公平氏の教示による。

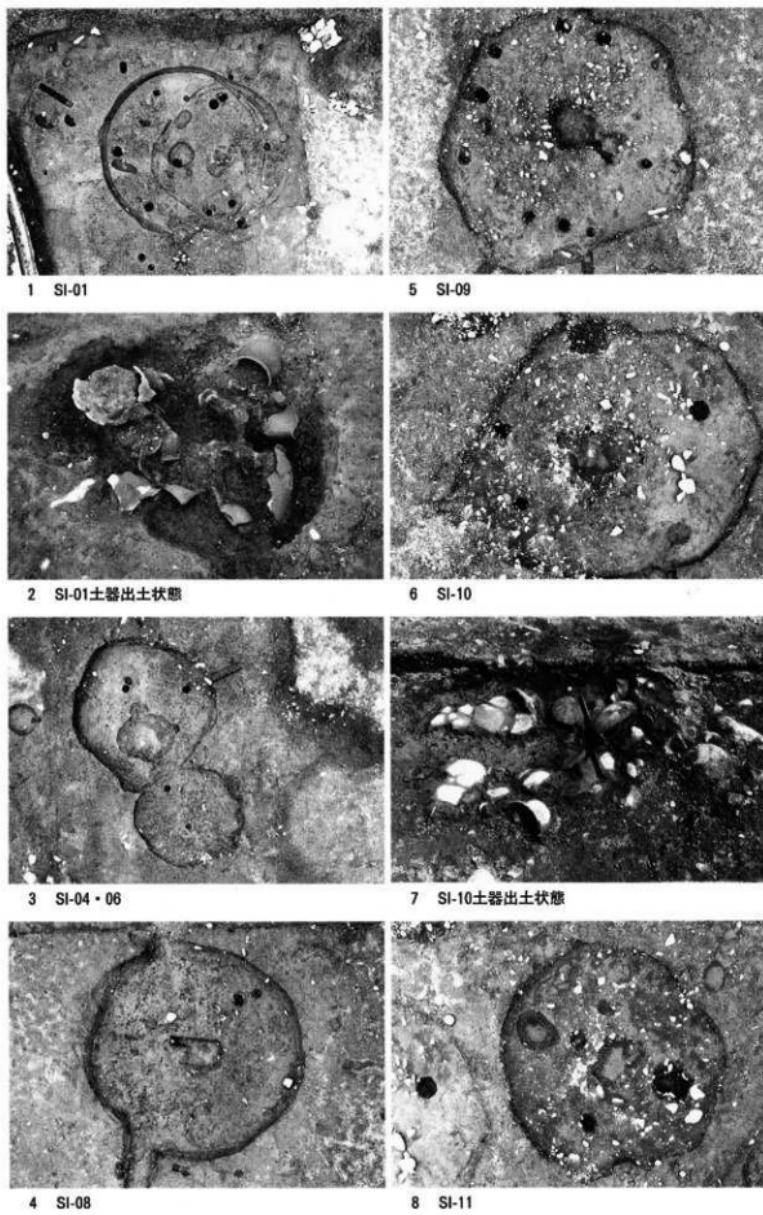
図 版

図版 1

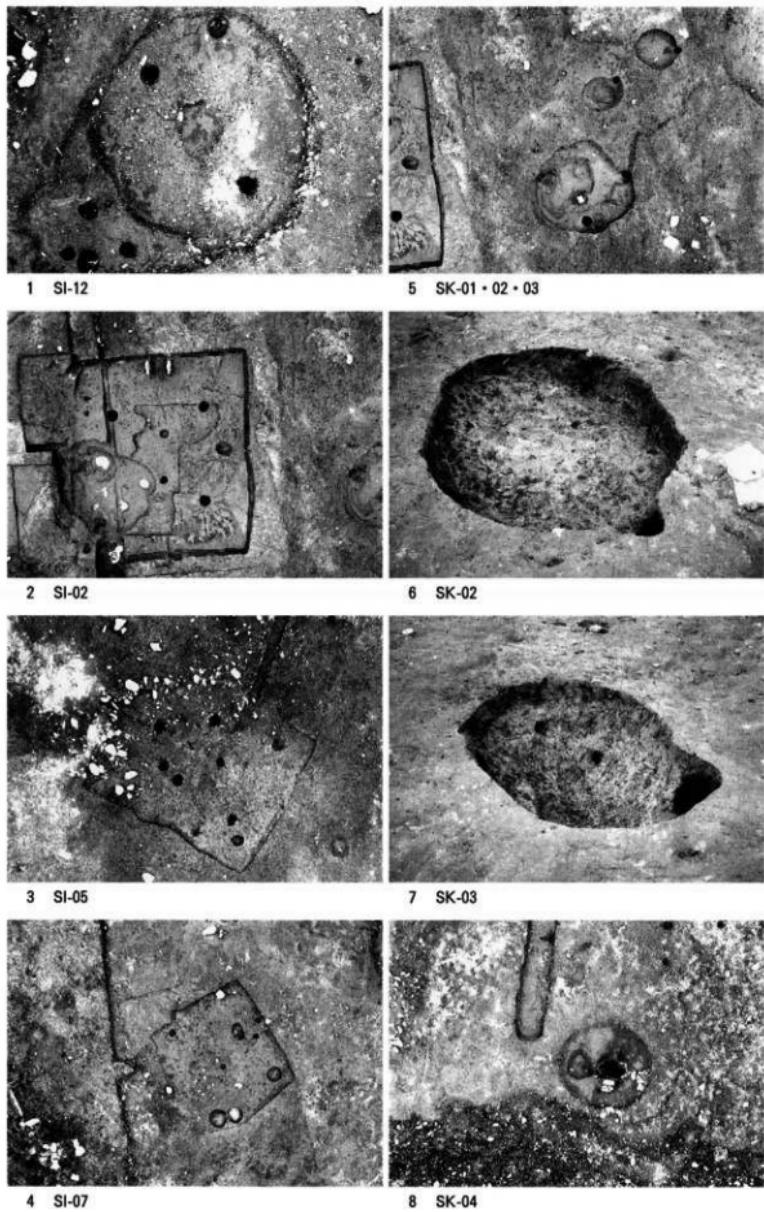


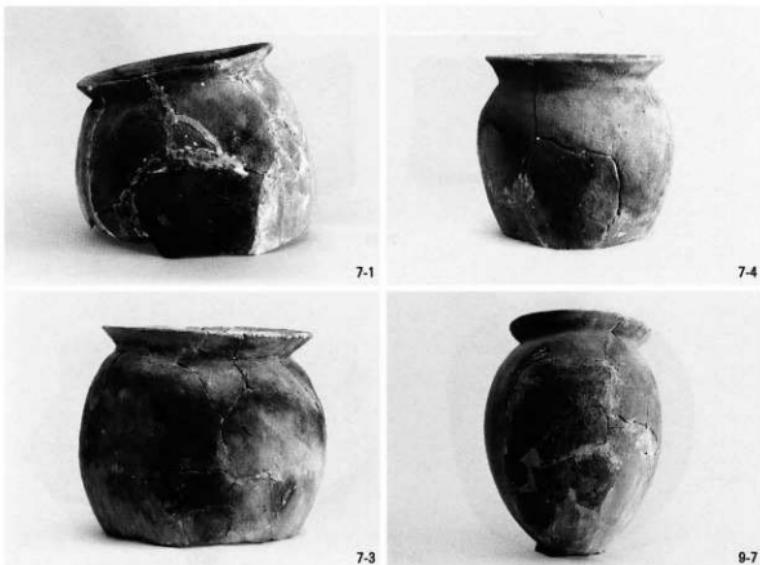
1 調査区全景

図版 2



図版 3



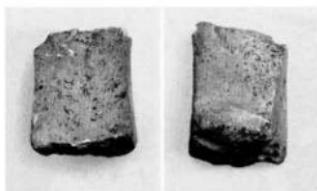


1 SI-01・b出土遺物

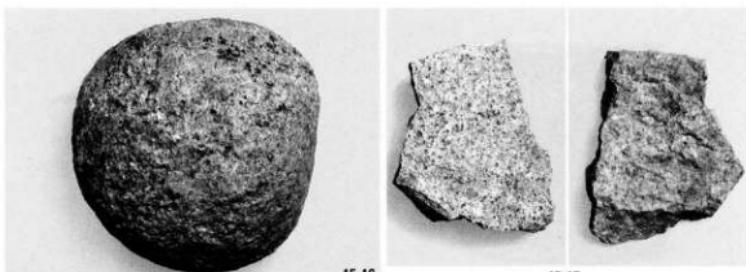


2 SI-06出土遺物

図版 5



15-15



15-16

15-17

1 SI-06出土遺物

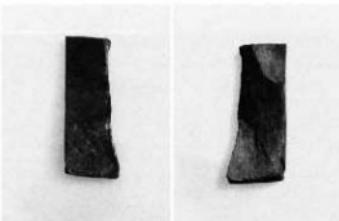


17-1

2 SI-08出土遺物



19-1



19-5



19-3

1 SI-09出土遺物



21-1

2 SI-10出土遺物



21-3



21-4

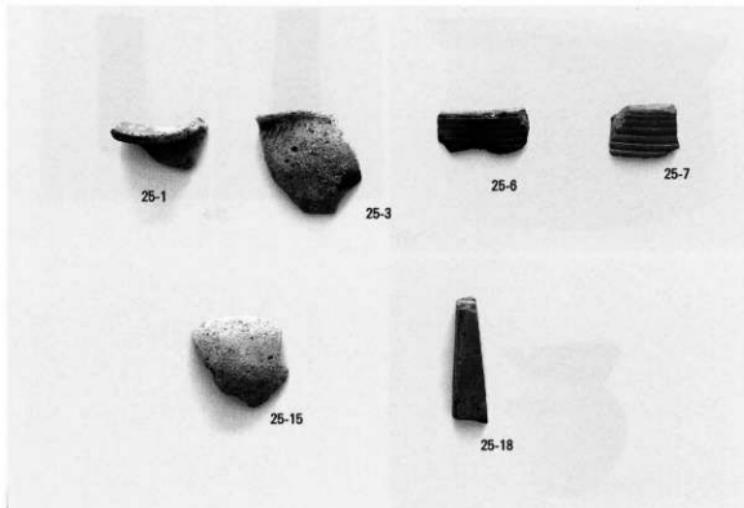
2 SI-10出土遺物



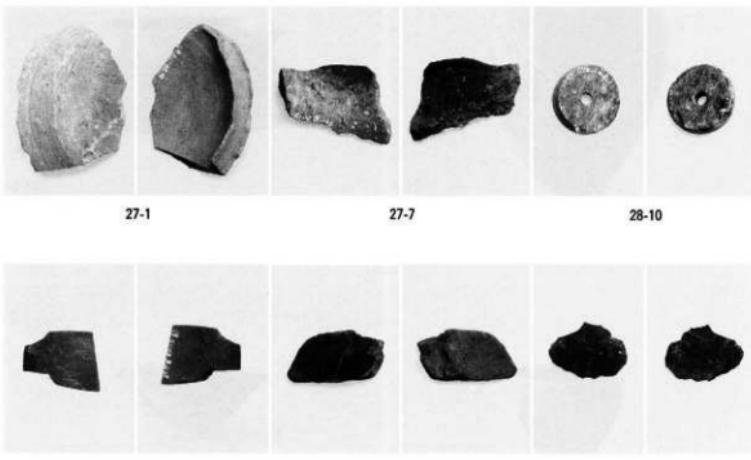
3 SI-11出土遺物

23-4

図版 7



1 SI-12出土遺物



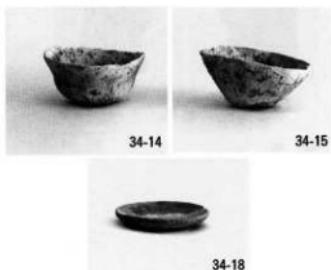
2 SI-02出土遺物



1 SI-07出土遺物



34-10



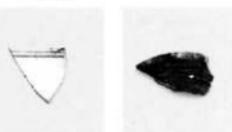
34-14

34-15

34-18



34-3



34-7



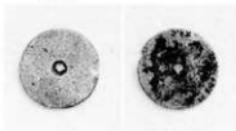
34-8



35-20



35-24



35-22

2 その他出土遺物



36-1



36-2



36-3



36-4



36-5

## 1 鉄 器

# 報告書抄録

フリガナ	オキパイセキハックツチョウサホウコクショ
書名	沖場遺跡発掘調査報告書
副書名	注連川地区県営圃場整備(担い手育成型)事業に伴う埋蔵文化財調査
編集者名	水津浩信
編集機関	六日市町教育委員会
所在地	〒699-5513 島根県鹿足郡六日市町大字六日市648 TEL(0856)77-1111
発行年月日	西暦2000年3月

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オキパイセキ 沖場遺跡	シマネケン 島根県 カノアシダン 鹿足郡 ムイカイチヨウ 六日市町	32504	V40	34度 21分 24秒	131度 54分 24秒	19990114 ~ 19990709	5,000m <sup>2</sup>	圃場整備 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項
沖場遺跡	集落址	弥生時代 古墳時代	堅穴住居址 9 堅穴住居址 2	弥生土器・土師器・須恵器 土師器・須恵器	

## **沖場遺跡発掘調査報告書**

注連川地区県営圃場整備（扱い手育成型）事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成12年（2000）3月発行

編集・発行 六日市町教育委員会  
島根県鹿足郡六日市町大字六日市648番

印刷・製本 友貞プリント店  
島根県鹿足郡六日市町大字六日市833番